

福岡外環状道路関係 埋蔵文化財調査報告

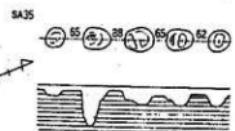
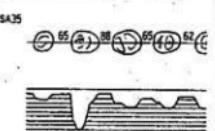
— 3 —

福岡市早良区次郎丸所在次郎丸遺跡第2次調査

1997

福岡市教育委員会

福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告一3—正誤表

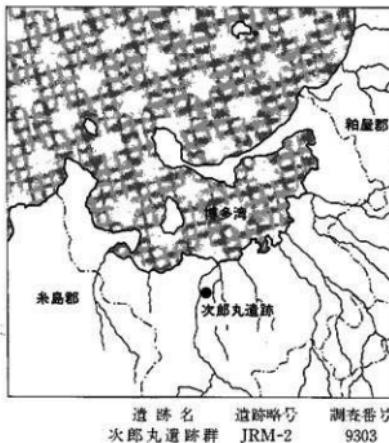
頁	行	誤	正
1 4	Fig 10		
図版 1		調査区全景（南から）	調査区全景（東から）
図版 8		(1) S D11・S A35	(1) S D27・S A35
図版10	遺物番号	5 8	5 9
図版11		S D14の遺物で遺物番号なし	9 5
付図.1		S K54	S K50

NO. 31808

福岡外環状道路関係 埋蔵文化財調査報告

— 3 —

次郎丸遺跡第2次発掘調査報告



1997

福岡市教育委員会



福岡外環状道路（IV工区）予定地の景観（東から見る）

序

福岡外環状道路は、福岡市西区姪浜から粕屋郡粕屋町戸原までを結ぶ都市計画道路で、延長26.4kmの路線をいいます。本道路は福岡市西南部地区の交通問題の鍵をなぎる幹線道路で、早急な供用が望まれております。現在、志免町と月隈間、姪浜と野芥間など一部区間の供用が行われております。

今回報告する次郎丸遺跡は、福岡外環状道路の橋重・野芥間に所在し、道路建設工事に先立って平成5年度に発掘調査を実施いたしました。

今回の調査では、前年度報告いたしました第1次調査と同時代の建物や礎・溝・井戸などからなる中世集落を発見し、多大な成果を得ることができました。

最後になりましたが、発掘調査に際し、建設省福岡国道工事事務所の関係者及び地元の方々はじめ発掘調査から整理・報告まで多くの皆様のご理解とご協力を得ました。ここに感謝の意を表します。併せて、本書が市民の皆様の文化財保護に対するご理解の一助となるとともに、広く活用していただけることを願う次第です。

平成9年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田 英俊

例　　言

1. 本書は、福岡外環状道路の建設省施工区間にあたる福重・野芥間の道路建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が1993年の4月から7月にかけて発掘調査を実施した次郎丸遺跡（分布地図では次郎丸遺跡群）第2次調査の報告書である。福岡外環状道路関係の埋蔵文化財調査報告書としては第3集にあたる。
2. 発掘調査は上記の主体により行われ、調査の担当は山崎龍雄（現福岡市博物館学芸課）が行った。
3. 遺構の実測は、山崎龍雄、池田祐司、加藤隆也、侯寛司、瀬戸啓治、坂本憲昭、金子巾利子、清水ユリ子、倉光京子、内野重樹が行った。また遺物の実測は、井上加代子が主に行い、一部を山崎が補助した。石器の一部は福岡市埋蔵文化財センターの吉留秀敏が行った。
4. 遺構番号は、福岡市の遺構登録の基準によっている。
S A…柱、S B…掘立柱建物、S D…溝状遺構、S E…井戸、S K…土坑、S P…柱穴、S X…その他の遺構
ピット以外の遺構はその性格を問わず通し番号で登録し、ピットについては独自で番号を付している。
5. 中国產貿易陶磁器については博多遺跡における分類によっている。
6. 本書使用の写真は、主に山崎龍雄が撮影し、空中写真は株式会社空中写真企画が撮影を行った。
7. 本書使用の図面の製図は山崎と井上、石器の一部は吉留が行った。
8. 本書に使用した方位は磁北であり、真北との偏差は西偏6°10'である。また各調査地点間で方位に若干の相違があった為、文化財分布地図の方位を使用した。
9. 調査に係る記録類・出土遺物は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用して行く予定である。
10. 本書の試筆・編集は山崎が行ったが、石器の一部については吉留氏の協力を得た。

次郎丸遺跡第2次調査概要

遺跡調査番号	遺跡略号	分布地図番号	調査地地籍	調査実施面積	調査期間
9303	JRM-2	092-0315	早良区次郎丸四丁目 386-1外	1,600m ²	1993.04.19 ～07.26

本文目次

	頁
Iはじめに	1
1. 調査に至るまで	1
2. 1992・1993年度の調査体制	4
II遺跡の立地と歴史的環境	5
1. 遺跡の立地	5
2. 遺跡の歴史的環境	5
III調査の記録	7
1. 調査の概要	7
2. 第1面の調査	7
3. 第2面の調査	34
4. 小結	37

図版目次

卷頭1 福岡外環状道路（IVT区）予定地の景観（東から見る）	
図版1 調査区全景（南から）	
図版2 (1)調査区南西側 (2)調査区北側	
図版3 (1)調査区南東側（南東から） (2)調査区南東隅（西から）	
図版4 (1)SB10（南から） (2)SB43・SA41・42（東から） (3)SB44（西から） (4)SB45（東から）	
図版5 (1)SB46（南から） (2)SB59（東から） (3)SE16（北から） (4)SE16石組（東から）	
図版6 (1)SE23（西から） (2)SE24（南東から） (3)SK09（北東から） (4)SK28（北から）	
図版7 (1)SK04（北から） (2)SK06（北から） (3)SK07（東から） (4)SK17（北東から） (5)SK18（北東から） (6)SK29（北東から） (7)SK54（北東から） (8)SK56（北から）	
図版8 (1)SD11・SA35（東から） (2)SD14（西から） (3)SX55東壁土層（西から） (4)調査区西壁土層（東から）	
図版9 (1)SX55検出状況（南西から） (2)遺物129出土状況 (3)出土遺物1（縮尺不統一）	
図版10 出土遺物2（縮尺不統一）	
図版11 出土遺物3（縮尺不統一）	

挿 図 目 次

Fig. 1 福岡外環状道路路線図	1
Fig. 2 福岡外環状道路IV工区調査遺跡位置図	2
Fig. 3 次郎丸遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50,000)	6
Fig. 4 SB10・43 (1/60)	8
Fig. 5 SB44 (1/60)	9
Fig. 6 SB45・46 (1/60)	10
Fig. 7 SB59 (1/60)	11
Fig. 8 SB61 (1/60)	12
Fig. 9 捩立柱造物出土遺物 (1/3)	13
Fig. 10 SA35・41・42 (1/60)	14
Fig. 11 SA60 (1/60)	15
Fig. 12 SE16 (1/30)	16
Fig. 13 SE16出土遺物 (1/2・1/3)	17
Fig. 14 SE23・24 (1/30)	18
Fig. 15 SE23・24出土遺物 (1/2・1/3)	19
Fig. 16 SK01・03・04・06・07・17 (1/30)	21
Fig. 17 土坑出土遺物 1 (1/3)	22
Fig. 18 SK09 (1/40)	23
Fig. 19 SK18・22・29~31 (1/30)	24
Fig. 20 土坑出土遺物 2 (1/3・1/4)	25
Fig. 21 SK28・32 (1/30)	26
Fig. 22 SK50・51・54・56 (1/30)	27
Fig. 23 溝出土遺物 1 (1/3)	30
Fig. 24 溝出土遺物 2 (1/3)	31
Fig. 25 ピット出土遺物 1 (1/3・1/4)	32
Fig. 26 ピット出土遺物 2 (1/2)	33
Fig. 27 遺構面出土遺物 (1/3・1/1)	33
Fig. 28 SX34・48・55・57出土遺物 (1/3)	34
Fig. 29 第2面及びトレンチ出土遺物 (1/3)	35
Fig. 30 各遺構出土剝片石器 (2/3)	36
付図 1 調査区遺構配置図 (1/150)	
付図 2 調査区東壁・西壁土層 (1/80)	
付図 3 次郎丸遺跡第1~3次調査主要遺構配置図 (1/400)	

I はじめに

1 調査に至るまで

福岡外環状道路は、昭和44年に都市計画決定された都市計画道路、井尻柏屋線・井尻姓浜線で、西区姪浜から柏屋郡柏屋町戸原間の延長26.4kmの道路である。今回調査の対象となっている部分は、建設省施工の福重から月隈間の16.2kmの、一般国道202号福岡外環状道路と呼ばれる区間である。

福岡市では、平成7年度に大学生の世界的なスポーツの祭典であるユニバーシアード大会を福岡で開催することになり、それに向けての都市基盤整備の推進が必要になり、福岡外環状道路建設が具体化してきた。平成元～3年に、建設省福岡国道事務所（以下国道事務所とする）より、福岡外環状道路予定路線内の埋蔵文化財の事前調査願いが埋蔵文化財課（以下埋文課とする）に提出された。これを受け、埋文課は東側からI～IV工区と番号づけられた各工区で、用地買収が終了した部分について随時、試掘調査を実施した。

各工区で試掘調査を実施した結果、I工区では、博多区井柏田、立花寺、板付、笹原地区、IV工区では橋本、次郎丸、免、千隈、野芥地区で遺跡を確認した。これらの試掘の結果をうけて、遺跡が確認された地区について、国道事務所と協議を行い、発掘調査が必要となった部分について、調査の費用を建設省が負担するということで、調査を実施することとなった。

調査は平成3年度にI工区の井柏田地区でまず行われ、その後、ユニバーシアード福岡大会までに部分開通が至上命題となったIV工区の調査を優先して行うこととなった。平成4年度から7年度にかけて次郎丸遺跡群、次郎丸高石遺跡、免遺跡群、野芥大蔵遺跡、野芥遺跡群、橋本一丁田遺跡、橋本遺跡群の調査が行われた。今回の報告は平成5（1993）年4月から7月にかけて実施した、次郎丸遺跡第2次調査の調査記録である。

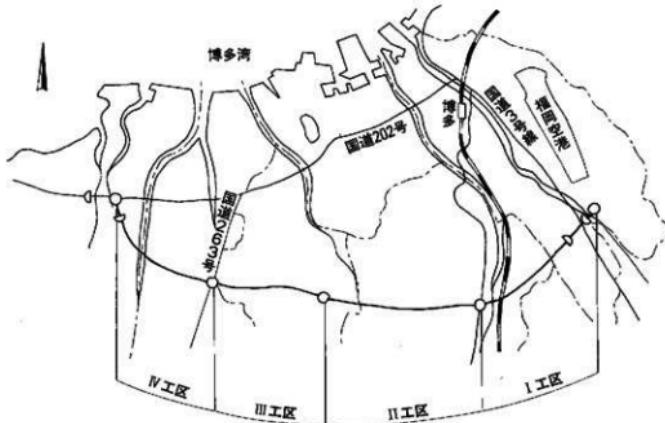


Fig. 1 福岡外環状道路路線図

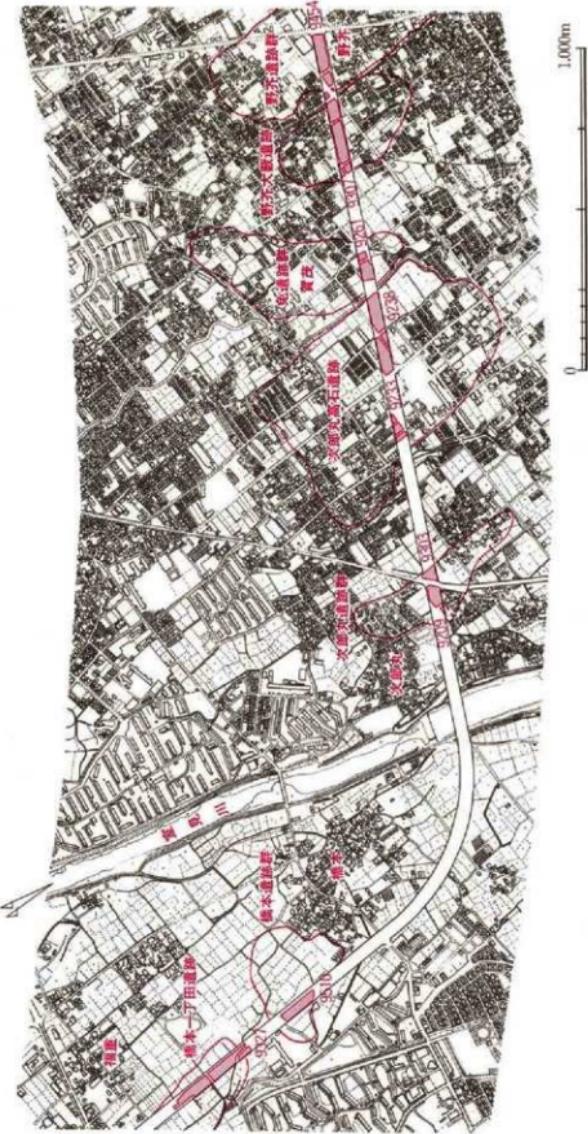


Fig. 2 福岡外環状道路IV工区調査遺跡位置図

外環状道路調査区一覧表

年 度	調査 番号	遺跡名	所 在 地	調査期間	調査 面積m ²	調査 担当	調査の概要
平成3	9128	井相山D遺跡第1次	博多区井相山地内	910925~920331	5,060	佐藤一郎	古代から中世にかけての水田、2箇の調査
平成4	9209	次郎丸遺跡第1次	早良区次郎丸二丁目 563~570番	920519~920829	1,955	山口謙治	弥生時代の溝、古墳時代の大溝 古代から中世にかけての集落 市報文第467号
	9233	次郎丸高石遺跡第2次	早良区次郎丸一丁目58、 59・61・63	920731~921103	1,503	山口 山村昌太郎	古墳時代の集落 市報文第467号
	9238	次郎丸高石遺跡第3次	早良区次郎丸三丁目地内	920924~930329	7,955	山口・山村	古墳時代から奈良時代の自然流路 中世水の発見 今年度報告
	9261	角鹿跡第2次	早良区真茂二・三丁目地内	930106~930921	2,543	山口・山村 ・池田裕司	縄文時代前期の包含層、弥生時代の溝・井戸 古墳時代の溝・井戸、櫛 今年度報告
平成5	9303	次郎丸遺跡第2次	早良区次郎丸四丁目地内	930419~930726	1,600	山崎龍雄	古代火から中世にかけての集落 今年度報告
	9307	野芥大蔵遺跡第1次	早良区真茂二丁目地内	930518~940627	8,752	山崎	縄文時代匂河遺、古墳時代集落、 古代溝と片堀 江戸時代集落
	9327	橋本一丁目遺跡第2次	西区橋本一丁目地内	930901~940331	9,178	池田裕司 山村昌太郎	古墳時代溝・土坑 奈良時代早期水田・溝・匂河遺、 土坑
平成6	9454	野芥遺跡第5次	早良区野芥二丁目地内	940420~941215	5,535	山崎	弥生時代溝、古墳時代集落、中世 から近世の溝、水田
平成7	9510	橋本遺跡第1次	西区橋本地内	950322~950615	1,030	杉山嘉穂	古墳時代自然流路
平成8	9637	井相田D遺跡第2次	博多区大字立花寺地内	960904~	対象 2,675	井沢洋一	古代から中世にかけての水田

2 1992・1993年度の調査体制

調査体制としては、1992年度に福岡外環状道路担当として主任文化財主事を4月に1名配置し、10月には文化財主事1名を配置し、2名の体制で調査を行った。1993年度はIV工区を94年に福岡で開催するユニバーシアードに開通を間に合せるという目標の為に、更に1名追加配置し、合計3名で工区内の調査にあたった。具体的には、まず前年度からの継続であった免遺跡の調査を山口・池田・中村で行い、その後、山口と山崎が交替し、4月から次郎丸遺跡の残り部分の調査を山崎が担当し、その後の野芥大蔵遺跡も山崎が担当し、中村・池田は免遺跡終了後、引続き橋本・丁田遺跡の調査を担当した。

調査については、建設省福岡国道事務所および本市土木局外環状道路推進部をはじめとする関係者各位の協力のもとに、順調に終了することが出来た。記して感謝の意を表する次第である。

調査主体	福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課 教育長 尾花 剛（前任） 司田英俊 文化財部長 後藤 直 埋蔵文化財課長 折尾 学（前任） 荒巻輝勝 大規模遺跡調査担当課長 塩屋勝利（前任）
1993年度調査担当	山口謙治（主任文化財主事、4月まで 現同課第2係長） 山崎龍雄（主任文化財主事、5月から 現福岡市博物館学芸課） 池田祐司、 中村啓太郎（文化財主事）
試掘調査担当	井澤洋一（主任文化財主事） 龍本正志、加藤良彦、吉武学
庶務担当	入江幸男（前任）、小森 彰
調査・整理調査員	加藤隆也（現本市埋蔵文化財課文化財主事）、加藤周子、井上加代子、俵寛司（九州大学大学院）
調査・整理協力者	瀬戸啓治、坂本憲昭、上野道郎、田中榮、甲斐正耕、中野三平、西畠盛行、平田勇雄、綱田美代野、内野亜湖、金子由利子、川口シゲノ、清原ユリ子、倉光京子、後藤ミサヲ、永井ゆり子、西島マツコ、西鳴ムラ子、西鶴洋子、原ハナエ、平田タマエ、平田千鶴子、平田政子、堀川ヒロ子、森山早苗、山下アヤ子、脇坂チカ、脇坂ミサヲ、赤星攝、有吉千栄子、池田礼子、上野裕子、大賀順子、吉良山益美、武田祐子、塚本直子

II 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地 (Fig. 3)

次郎丸遺跡（文化財分布地図では次郎丸遺跡群）は、福岡市の西南部に位置する早良平野の中央部に所在する。国土地理院の5万分の1の地図（福岡）では、上から27cm、右から31.3cmの地点である。

早良平野は中央を南北に貫流する室見川とその支流や十郎川によって形成された沖積平野で、西側は長垂丘陵、南側は背振山塊、東側は油山によって限定され、その形状は北に開く扇形をなす。今回調査の次郎丸遺跡は室見川中流部の東岸、標高10m前後の低位段丘上に立地する。前年報告の次郎丸遺跡第1次調査区は道路を挟んで西側、第3次調査区は南側に隣接している。

2. 遺跡の歴史的環境

次郎丸遺跡群が立地する早良平野は旧石器時代からの遺跡が知られている。旧石器時代の遺跡は数は少ないが、平野周辺の室見川西岸の早良西台地の古武遺跡や平野部中央の小田部台地の有田遺跡群で調査が行われている。縄文時代は周辺の丘陵や台地、内陸平野部の内野から四倍、田村、有田あたりの地域まで、縄文時代前期から晩期にかけての遺跡が分布する。遺跡は平野下流の低地部にはまだ立地していない。次郎丸遺跡の東側の高石遺跡では後期から晩期の遺物・遺構が調査されている。

弥生時代になると水田農耕が始まるという生業形態の変化から、遺跡は下流低地部から海岸砂丘部まで広がる。室見川中流西岸の青武遺跡で弥生時代前期末から中期にかけて、多くの斎墓式土器が出土し、弥生時代のクニの王墓と考えられている。ほかに有田遺跡などいくつかの拠点集落が存在している。次郎丸遺跡東側の免道跡群では昭和48年と平成5年に、IH金屑川に構築された弥生時代以降の水利施設の井堰が調査されている。

古墳時代の遺跡は前時代と同様に分布する。海岸砂丘部の藤崎遺跡群では方形周溝墓が調査され、主体部から副葬品として三角縁神獣鏡が出土し、また海岸部の五島山では前期の古墳が調査されている。また前方後円墳は少なく、今のところ坪塚古墳や極波古墳、梅林古墳などが知られているだけである。後期になると群集墳が西側の長垂・飯盛山山麓や東側の油山山塊山麓に多数築造される。周辺の集落遺跡としては、北側に有田遺跡群、原遺跡群、南側に田村遺跡群などがある。

歴史時代になると、古代は早良郡となる。早良郡には6または7郷があったことが知られ、次郎丸周辺は野芥郷になり、また次郎丸周辺には「三十田」「池ノ坪」などの条里制地割の地名が残り、都市化が進む前迄は、水田、道路等に条里の遺制が良く残っていた。また南側の田村遺跡群では古代から中世にかけての集落遺跡が調査されている。また有田遺跡では7~8世紀頃の官衙跡かと思われるような大型の建物群が確認されている。

中世の鎌倉~戦国期は文献に早良郡次郎丸名というのが認められる。管崎宮領で、本家は石清水八幡宮であった。石清水文書のなかに次郎丸に関する記録があり、箱田氏とか隅田氏が次郎丸名の地頭職であったという。江戸から明治時代にかけては早良郡次郎丸村であり、鳥飼町に所属する。枝郷としては高石村・立屋敷村があった。



Fig. 3 次郎丸遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50,000)

III 調査の記録

1. 調査の概要（付図1・2、図版1～3）

調査地は早良区次郎丸四丁目386-1外に所在し、西側の第1次調査区とは県道四箇・次郎丸・弥生線を挟んで向かい合い、第3次調査区は南側に接する県道拡幅部分である。当調査区はセメント工場跡地であったので、本来の水田面の上に多量の盛土がなされていた。調査はバックホウで遺構面まで掘り下げ、その上の余分な土を除去する作業から始めた。調査は周囲が道路や駐車場などに接しているため、境界から十分な引きを取って安全に配置した。遺構面の深さは南側で約0.7m、北側で約1.2mで、遺構面の標高は9.2～9.8mを測り、傾い段を持って北側が一段低くなる。遺構面の土層は上から40～80cm盛土、25～40cm水田耕作土、高所部にはその下に遺物を含む層がある。遺構面は砂礫及びシルト層で高所部では、その遺構面中に遺物を含む。この面の時代は古代末から中世前期で、検出した遺構は掘立柱建物や槽、井戸、土坑、溝などである。ただ西側の第1次調査区では古代末から中世の面とその下に弥生時代早期から中期の遺構面を確認しているので、第1面の調査終了後、さらに地山を重機や人力で掘り下げ、ピットの掘り残しや下面の遺構の確認を行った。その結果、新たに上面で見落としたピットを確認したが、南北側境界地と北側段落ち下で縄文時代の遺物を含む落ちこみを確認したのみで、明確な下面での遺構は検出できなかった。

2. 第1面の調査

古代末から中世前期の時期で、遺構面は暗褐色灰色砂礫及びシルトから灰黃褐色粗砂混じり粘質土である。遺構は主に南側の高所部で確認した。検出した遺構は掘立柱建物7棟、槽4列、井戸3基、土坑約20基、溝状遺構8条、ピット多数を数える。

掘立柱建物

高所部で5棟、低所部で2棟確認した。柱穴の一部は第2面で確認している。

SB10 (Fig. 4、図版4-(1))

北西側境界で検出した主軸をN-88°Eに取る、柱間が2×3間と予想される建物である。規模は桁行き全長5.71m、梁行き全長3.97mを測る。建物床面積は推定で22.7m²である。東梁脚で、床東が間仕切りの柱穴がある。柱筋は大体通る。柱穴は円形から楕円形で、直径は20～30cm、深さは10～25cmを測り、余り大きくなはない。柱穴埋土は黒褐色土を主体とする。出土遺物はない。

SB43 (Fig. 4、図版4-(2))

南西側高所部で検出した主軸をN-86°30' Eに取る、柱間が2×3間で東梁側に1m前後張り出す庇が付く純柱の建物である。規模は庇部分も含んで桁行き全長6.26～6.41m、梁行き全長3.40～3.51mを測る。建物床面積は身舎部分で21.2m²である。柱筋はきつと通らず、平面もやや歪む。柱穴は円形から楕円形で、直径は26～50cm、深さは20～60cm前後を測るが、中央の柱穴は比較的小さい。柱径は痕跡から約10cm前後と考えられる。柱穴埋土は黒褐色土系を主体とする。

出土遺物 (Fig. 9、図版9-(3)) 各柱穴から縄文土器や中世の土師器・黒色土器・内黒土器・白磁の細片が少量出土した。**1**は土師器の杯1/6片である。復元底径は約9cmで、調整はナデ、外底部は糸切り。外面部色調は黄褐色を呈し、胎土は精良。**2**は黒色土器碗1/4片。復元で口径15.2cm、高台径6.8cm、器高5.6cmを測る。器表は磨滅するが、内外面はヘラミガキ、外面部高台近くは工具の痕跡と指押さえ痕が残る。胎土は精良。**3～5**は土師器の鍋口縁部片。**3**の外縁は描かれたハケのちナデ消し、内面

III 調査の記録

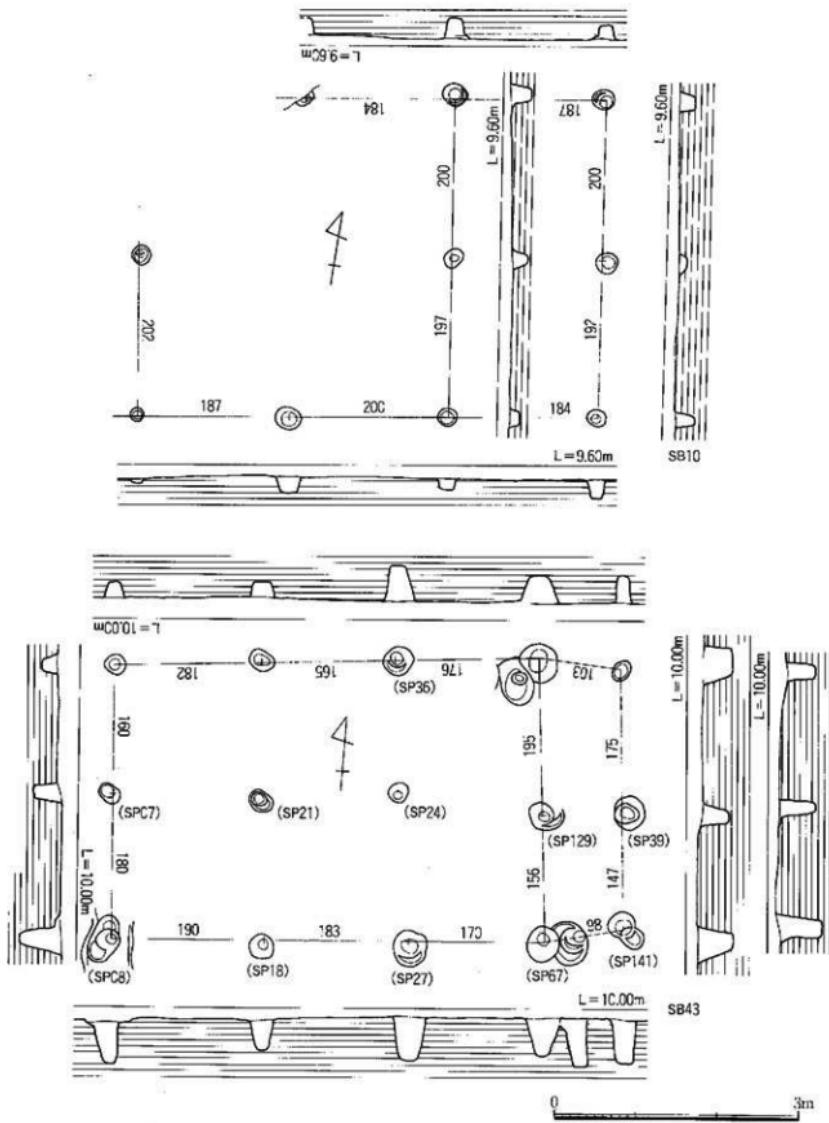


Fig. 4 SB10・43 (1/60)

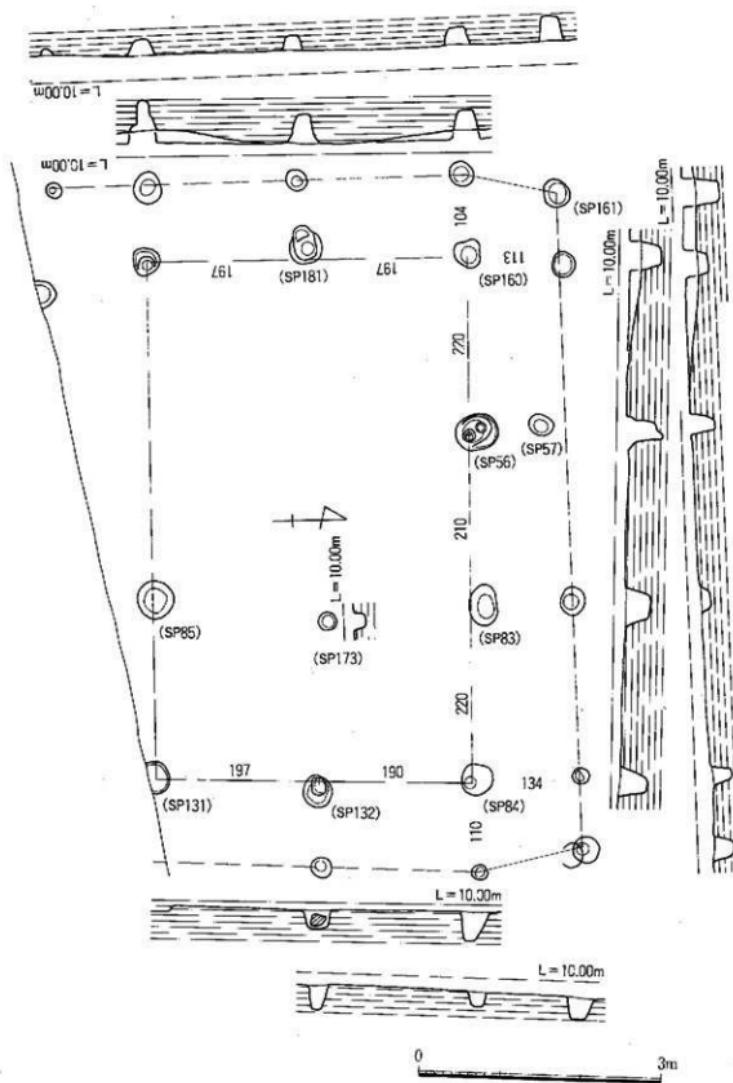


Fig. 5 SB44(1/60)

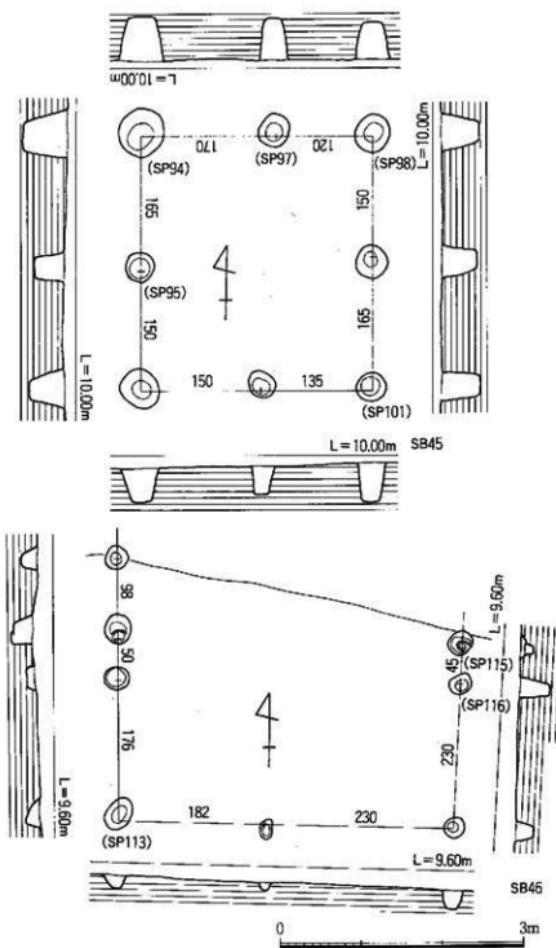


Fig. 6 SB45・46 (1/60)

はヨコハケで、内外面には指オサエ痕が残る。口縁部は貼り付けである。4の外面には煤が付く。色調は橙色と赤褐色で、胎上は砂粒を多く含む。5はナテ調整で焼成は良い。6は白磁体部小片。胎土は灰色で精良、表面には透明のオリーブ釉が薄くかかる。内面には氷裂が入る。7は滑石型の石鍋の体部片。残存長19.2cm、幅9.8cmを測る。体外側はノミによるタテ方向のケズリで、内面は丁寧なミガキ。

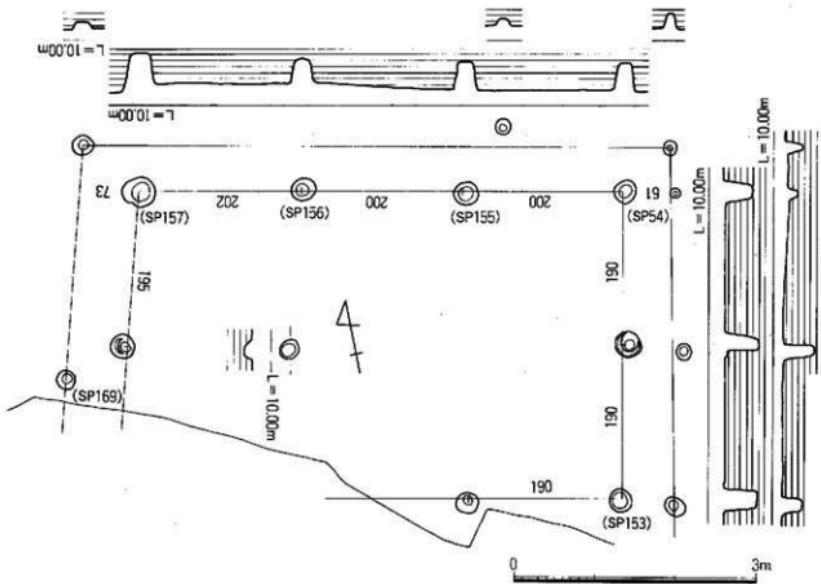


Fig. 7 SB59 (1/60)

体部には直径1.3cmほどの円孔があり、外面にかけて煤が厚く付着する。

SB44 (Fig. 5、図版4-(3))

南側境界地で検出した主軸をN—89°—Wに取る、柱間が 2×3 間で四面に庇が巡ると思われる建物である。一部SB61と庇の柱穴を共有する。規模は身舎で桁行き全長6.5m、梁行き全長3.87m～3.94m、庇部分まで含めると全長8.64mと全長6.23mを測る。建物床面積は身舎部分で25.4m²である。身舎内東側に直径20cm程の小ビットが1個ある。柱筋は通らず、平面の形状はやや歪む。柱穴は円形または楕円形で、直径は20～50cm、深さは8～40cmで身舎部分の柱のはうが一般に大きい。一部の柱穴には根石がある。柱穴埠上は暗褐色から暗灰褐色土を主体とする。

出土遺物 (Fig. 9、図版9-(3)) 5個の柱穴から中世の土師器片が少量出土している。8～10は土師器の皿。1/3片・1/4片・1/6片で、口徑は復元で10cm、11.2cm、7.3cm、器高は1.1cm、1cm、0.9cmを測る。8の表面はやや磨滅するが、底部はヘラ切り。9・10はナデ。色調はいずれも浅黄橙色である。

SB45 (Fig. 6、図版4-(4))

南側高所部で検出した主軸をほぼ磁北に取り、柱間が 2×2 間の方形を呈する建物である。規模は2.85m、3.15mを測る。建物床面積は約9m²である。柱筋はきっちと通る。柱穴は円形または楕円形で、直径は30～60cm、深さは35～55cmを測り、四隅の柱穴は特に大きく深い。柱穴埠上は暗灰褐色シルトを主体とする。

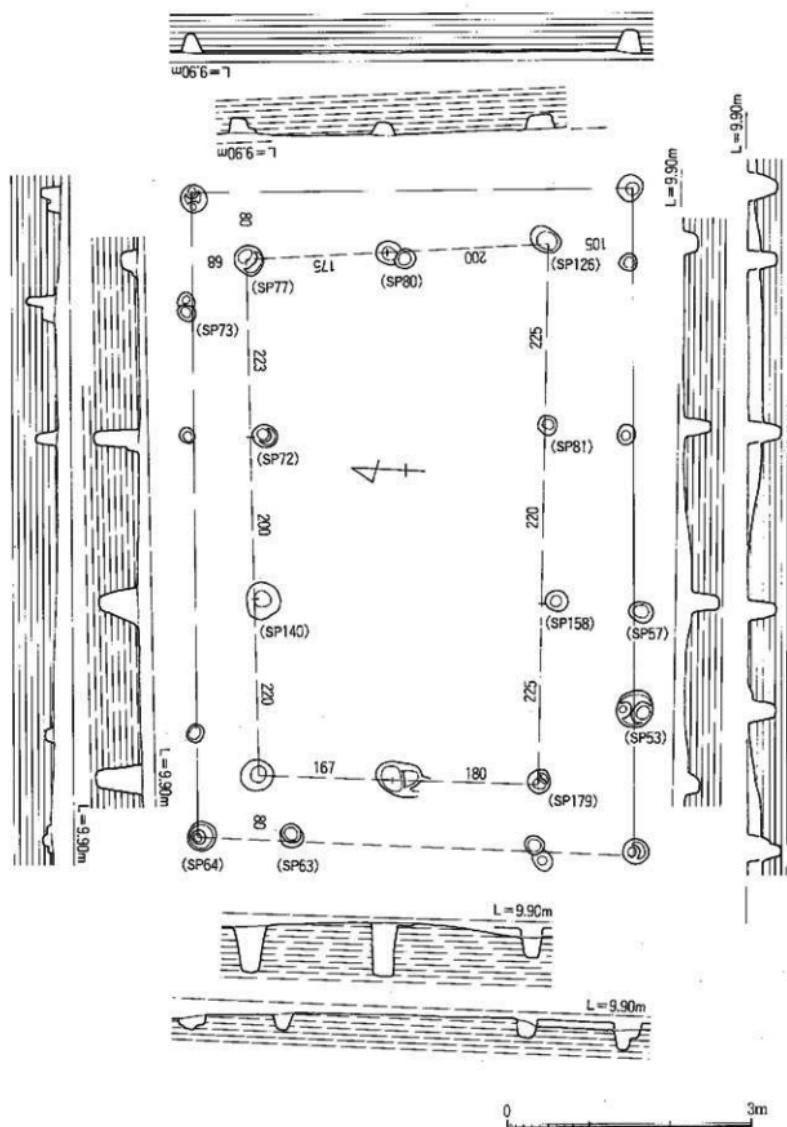


Fig. 8 SB61 (1/60)

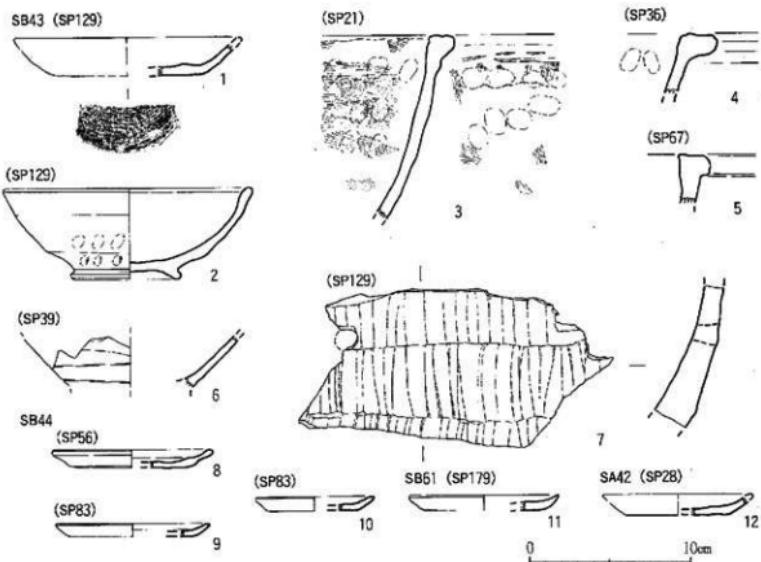


Fig. 9 掘立柱建物出土遺物 (1/3)

出土遺物 各柱穴から土師器皿の細片や白磁の細片が少量出土するが、図示出来るものはない。

SB46 (Fig. 6、図版 5-(1))

北側境界地にかかり、主軸を磁北に取る柱間が $1 + \alpha \times 2$ 間の建物である。規模は桁行き全長3.24m以上、梁行き全長4.12mを測る。全体の形はややいびつである。柱穴は円形または楕円形で、直径は約20~40cmで、深さは8~40cmを測り、深さにばらつきがある。柱径は痕跡から10cm前後か。柱穴埋土は暗褐色または黒褐色土から暗灰褐色シルトである。

出土遺物 一つの柱穴から土師器の細片が1点出土した。

SB59 (Fig. 7、図版 5-(2))

南側境界地で検出した主軸をN-78°30'-Wに取る、柱間が 2×3 間の四面に庇が巡ると思われる建物である。規模は桁行き全長6.02m、梁行き全長3.80m、庇まで含めると7.36mを測る。建物床面積は22.9m²である。柱筋は桁側はほぼ通るが、梁側は外へずれる。身舎内部に柱穴が1個ある。柱穴は大体円形を呈するが、直径は15~40cmで、深さは身舎部分で28~48cm、庇部分で10~28cmを測り、身舎の柱穴は大きく深い。柱径は痕跡から10cmぐらいか。柱穴埋土は暗褐色から黒褐色土を主体とする。

出土遺物 (Fig. 26) 各柱穴から中世の土師器の細片が少量出土している。123は鉄釘の破片か。

SB61 (Fig. 8)

南西部で検出した主軸をN-87°30'-Eに取る、柱間が 2×3 間の四面に庇を巡らす建物である。SB44と庇の柱穴を共有する。規模は桁行き全長6.43~6.70m、梁行き全長3.47~3.75mで、庇部まで含むと、桁行き8.03~8.10m、梁行き5.43~5.48m、建物床面積は23.7m²を測る。建物平面形はかなりいびつで、柱筋も通らない。庇の柱穴は身舎の柱穴とは対応しない。柱穴は円形または楕円形を呈し、柱穴径は25~55cm、深さは20~65cmを測り、身舎の柱穴は庇の柱穴に比べて大きく深い。柱径は痕跡

III 調査の記録

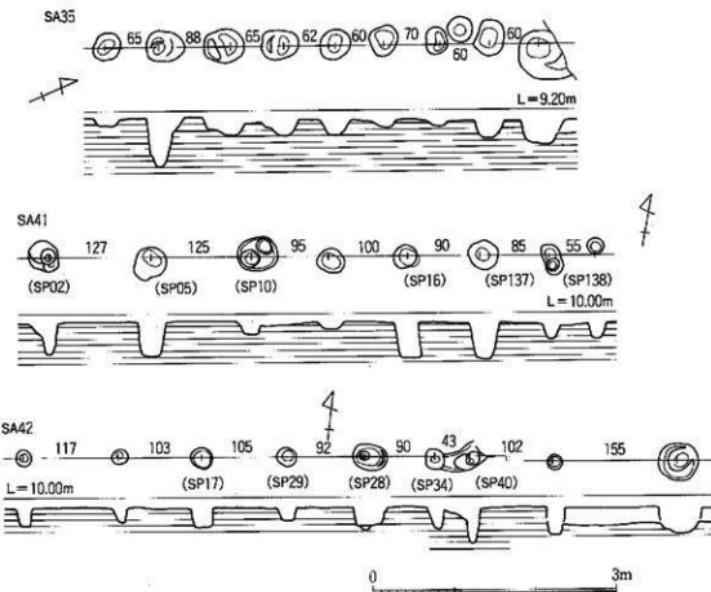


Fig.10 SA35・41・42 (1/60)

から15cmぐらいか。柱穴埋土は暗褐色土から黒褐色土を主体とする。

出土遺物 (Fig. 9) 各柱穴から古墳時代の須恵器や中世の土師器壺・黒色土器壺の小片が出土した。

構

SA35 (Fig. 10、図版 8-(1))

東側境界の高所部下で検出した主軸をN-22°-Eに取る、柱穴9個分の構である。確認規模は5.30mを測り、各柱穴間隔は60~88cmと狭い。柱穴は円形もしくは楕円形で、直径は30~50cm、深さ10~60cmを測り、大体は残りがよくない。柱穴埋土は暗灰褐色土を主体とする。出土遺物はない。

SA41 (Fig. 10、図版 4-(2))

南西隅SB43の南側で検出した主軸をN-79°-Eに取る、柱穴8個分の構である。確認規模は6.77mを測り、各柱穴間隔は55~127cmとややばらつきがある。柱穴は円形または楕円形で、直径は20~50cm、深さ10~48cmを測り、規模にかなりばらつきがある。柱穴埋土は黒褐色土を主体とする。

出土遺物 柱穴から中世の土師器、黒色土器、中国産白磁の細片がわずかに出土している。図示出来るものはない。

SA42 (Fig. 10、図版 4-(2))

SA41の北側、SB43の南約1mほど離れて平行する、主軸をN-84°-Eに取る柱穴9個分の構である。確認規模は8.07mを測り、各柱穴間隔は43~155cmと等間隔でない。柱穴は円形または楕円形で、直径は20~50cm、深さは18~44cmを測り、規模にばらつきがある。柱穴埋土は黒褐色土を主体とする。

出土遺物 (Fig. 9) 4個の柱穴から中世の土師器、内黒土器の細片が少量出土している。12は土

師器小皿底部1/6片。復元底径は6.4cmで、ナデ調整。

SA60 (Fig.11)

南東側で検出した主軸をN-7°-Wに取る機。確認した柱穴は9個であるが、上面で確認したのは1個で、他は一段造構面を下げるから確認した。全長は14.5m、各柱の間隔は150~174cmを測る。柱穴は円形または楕円形で、直徑は18~34cmと小さいが、その割には深く、しっかりしている。柱穴埋土は暗褐色土から黒褐色土を主体とする。出土遺物はない。

井戸状造構

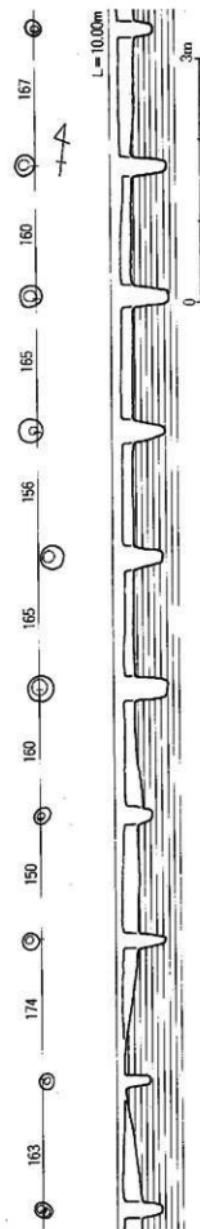
南側高所部で1基、北側低地部で2基検出した。井戸底までは浅く、深さ80~130cm余りである。

SE16 (Fig.12、図版5 (3)・(4))

南側高所部中央で検出した平面形が不整円形を呈する石組の井戸枠を持つ井戸である。SB45に切られる。規模は長径3.54m、短径2.8m、深さ132cmを測り、粗砂礫層まで掘り込んでいる。井戸底のレベルは8.55mを測る。石組は掘方のほぼ中央にあり、内径約30~35cmで、高さは最大で4段50cm程残る。石は大きくて人頭大の花崗岩の転石を横方向に雜に積み上げている。石組下の井筒などの施設については不明である。石組上面までは黒褐色粘土と礫混じり砂で裏込めされており、井戸底は長径1.44m、短径1.2mの楕円形を呈し、中央が1.0×0.8m、深さ17cmの規模で更に一段深くなる。この裏込めには白磁、底部糸切り土師器小皿、瓦器、黒色土器が含まれている。埋土は石組上面までは黒褐色粗砂混じり土を主体とし、下の方ほど礫石が多く含み、礫石は石組あたりに集中していた。

出土遺物 (Fig.13、図版9-(3)) 塗土、堀方、石組内からコンテナ1箱ほどの古代~中世前半の土師器、黒色土器、瓦器、少數の中国産輸入磁器、鉄製品、土鉤、滑石製品、鉄津などが出土している。

13~23は土師器。13~16は小皿。底部糸切りとヘラ切りの2種類がある。残存率は13が1/5以外は大体残存している。口径はそれぞれ復元9.4cm・9.6cm・8.6cm・10.1cm、器高は1.2cm・1.1cm・1.4cm・1.2cmを測る。器壁の調整はやや磨滅するものもあるがナデで、外底部は13に板目痕、14・15は回板糸切り、16はヘラ切りである。14の内面には指押さえ痕が残る。胎土は精良。17は環1/8片で、復元口径13.5cm、器高2.8cmを測る。調整はナデ。18は皿1/2片で、復元口径16.6cm、器高2.1cmを測る。調整は磨滅がひどいが体部から内底部はナデ、外底部はヘラ切りのちナデ。胎土は17・18とも精良。焼成は18が良好。19~22は高台付きの碗。19・20は口縁部1/7片・小片で、19の口径は復元で約15cmである。表面は磨減がひどいが、調整はナデか。胎土は精良。21・22は高台部1/2片・高台部片で、高台径は7



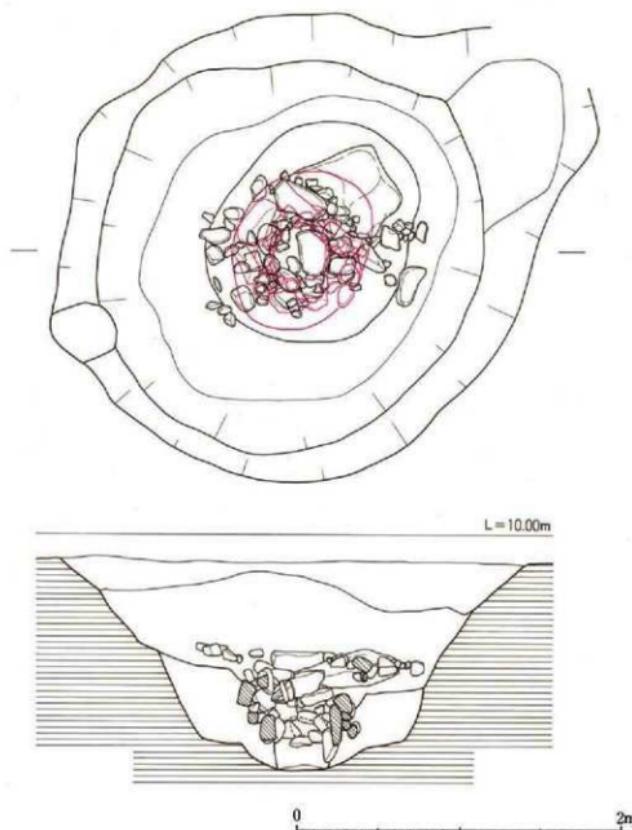


Fig. 12 SE16 (1/30)

cm・6.6cmを測る。調整はナデ。23は鉢の底部1/4片か。復元底径12.6cmを測る。磨滅がひどく調整は不明。胎土に粗砂を含む。24～27は黒色土器楕である。24・25は口縁部小片。24の調整は磨滅がひどいが外面はヘラミガキか、煤が付着する。25は内外面ヘラミガキで、外面には指押さえ痕が残る。色調は24は黒っぽい灰黄色で瓦器に近い。25は灰黒色を呈す。26・27は高台付きの底部1/3片と1/2片である。高台径は6.3cm・7.2cmを測る。26は磨滅がひどく調整は不明。27の内底はヘラミガキ、高台部はナデ。色調は26の外面はやや質味がかった黒色でいぶされている。胎土は27以外は精良。28・29は内黒土器楕底部1/3片・1/4片である。復元高台径6.4cm・5.8cmを測る。28は外面ナデ、内底はヘラミガキで工具痕が残り、高台内にはヘラ記号がある。29は磨滅がひどく高台部はナデ。胎土は密で良く、焼成は29が良い。30～34は瓦器。30は小皿3/4片。口径10.6cm、器高2.0cmを測る。内外面ヘラミガキ

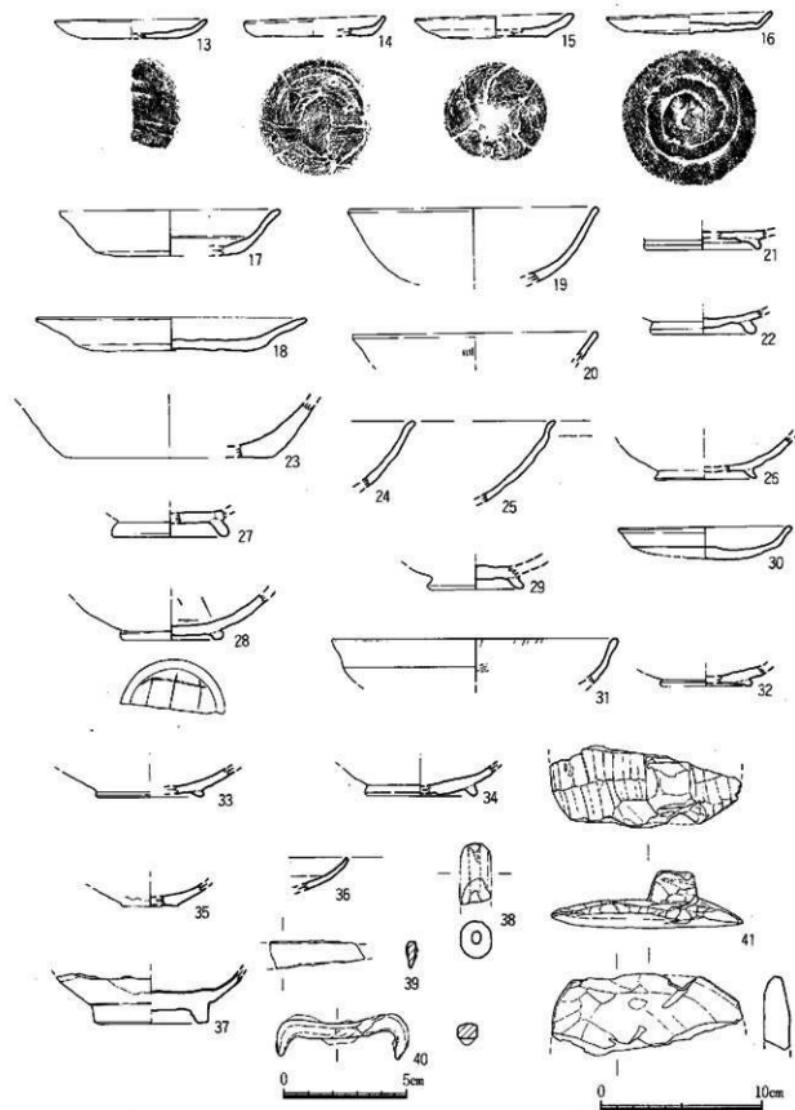


Fig.13 SE16出土遺物 (1/2・1/3)

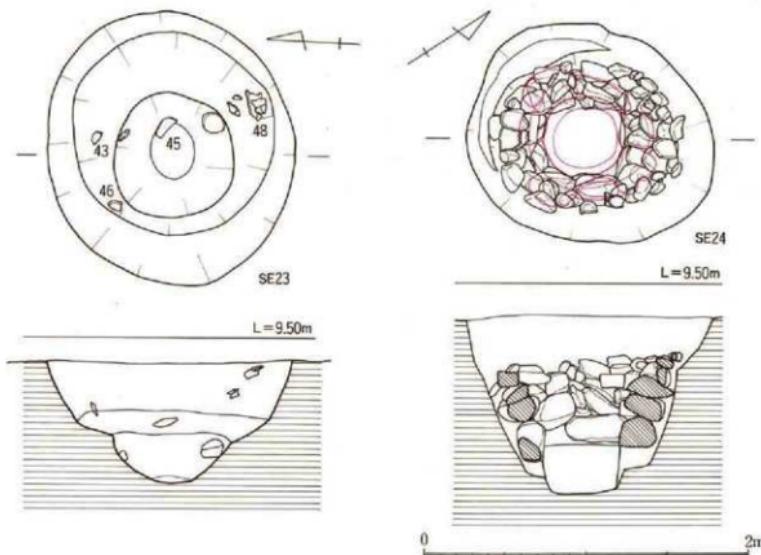


Fig.14 SE23・24 (1/30)

か。色調は外面黒っぽい灰黄色である。胎土は密で精良。31~34は碗。31は口縁部1/6片で、復元口径17.6cmを測る。磨滅がひどいが、内面にヘラ状工具痕が残る。32~34は高台から底部1/4片である。復元高台径は5.5cm・6.6cm・6.5cmを測る。調整はやや磨滅するが、ヘラミガキかナデ。胎土は32・33が密で精良。焼成は瓦器にしては余り良くない。35~37は白磁。35・36は博多分類II-1類の皿。35は底部1/3片。口径は不明。わずかに上底の底部は露胎で、体部から内面は薄い黄色を帯びた灰黄色釉が均一にかかる。36は口縁部小片。表面にややオリーブがかった灰色釉がかかり氷裂がはいる。37は碗の高台部1/2片で、復元高台径7cmを測る。高台は外面を直、内面を斜めに削り出して露胎、体部の釉はやや薄めにかかる。38は管状土錐片。残存長3.8cm、直径2.4cm、孔径0.7cmを測る。磨滅がひどく調整は不明。39・40は鉄製品。39は刀子の破片か。残存長3.9cmを測る。40はカスガイカ。全長5.4cmを測る。41は石鍋破片の転用品で、形態から蓋か。残存長11.8cm、幅5cmを測る。上面はノミによる削りで煤が着く、下面は削りのちミガキ。側面は再加工で削っている。

13・17・19・24・25・30・32・34・38・39は埋土上層、18・20~22・23・26・28・29・35・36・40・41は埋土下層、15・27・33は掘方、16・31は石組内、37は上層・下層・石組内出土である。

SE23 (Fig.14、図版6-(1))

調査区北隅、SB46と重複する略円形の井戸。規模は長径1.7m、短径1.52m、深さ75cmを測る。井戸底のレベルは8.7mを測る。壁断面はやや丸みを持ったすり鉢形状で、底面は二段掘り状を呈し、井戸底で規模は27×35cmを測る。埋土は凸レンズ状に堆積する。上層は黒褐色シルト質細砂で、その下方は明褐色細砂や炭化物を含み、井戸底は淡黒褐色シルト質細砂となる。上層の黒褐色細砂の周りは黄灰褐色細砂で、地山の黄灰褐色砂と少し異なり、井戸内埋土と考えられる。土層観察から、明確な井

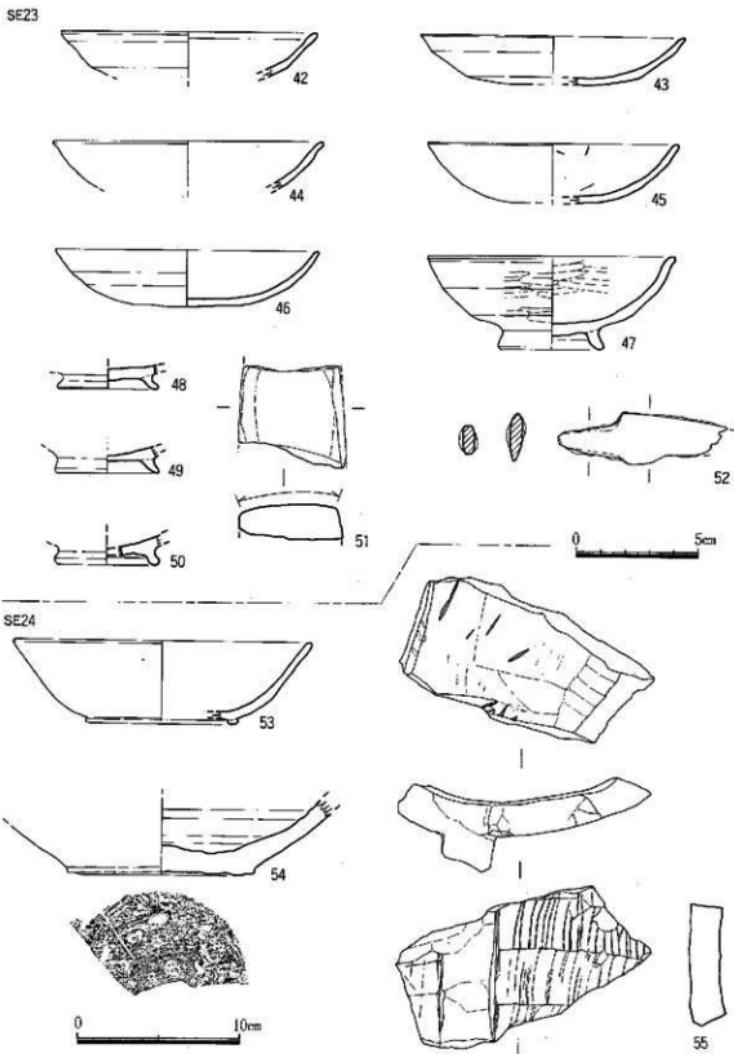


Fig.15 SE23・24出土遺物 (1/2・1/3)

III 調査の記録

筒は確認出来ず、素掘りの可能性が強い。

出土遺物 (Fig.15, 図版10) 上層を中心に11世紀から12世紀頃の土師器の壺・碗、古墳時代の土師器、鉄製品、黒曜石の剝片などが出土している。また図示していないが白磁の皿の細片が上層から1点出土している。

42~48は土師器。42~46は底部が丸底の杯である。残存率はそれぞれ1/6片・1/2片・1/4片・1/2片・1/2片で、口径はいずれも復元で15.7cm・16.2cm・16.6cm・15.4cm・16cmを、器高は43は3cm、44は3.6cm、45は3.5cmを測る。41は口縁部で調整はナデ、43は磨滅がひどいがナデか。44は口縁部でやや磨滅するがナデで、口縁内面が一部黒変する。45は磨滅がひどいがナデ、内面には工具痕が残る。46は内面の磨滅がひどいが、外表面はナデで、底部はヘラ削りか。胎土は42・45が精良、焼成はいずれも良い。47~50は高台付碗。47は土師器1/3片で、復元口径15.2cm、器高5.7cm、高台径6.5cmを測る。口縁端部がわずかに開き、高台部も外に開く器形である。調整は体部が内外面へラミガキ、口縁部と高台部はナデである。焼成は良い。48~50は高台部片。48・49は内黒土器か、高台径6.2cm・6.4cmを測る。高台部はナデ。色調は48は外面淡黄褐色、内面灰黒色、49は外面灰黄色、内面灰黒色を呈す。焼成はいずれも良い。50は黒色土器の1/2片。復元口径6.5cmを測る。高台端部は丸く収める。外表面ナデ。胎土は粗砂を多く含む。51は砾石の小片で、残存長・幅、6.2cm・6.7cmを測る。目の細かい砂岩で、上面を使用している。52は鉄製の刀子片で、残存長7cm、最大幅2.1cm、厚さ0.6cmを測る。42・43・48・47・49・51は埋土上層、44・50は下層出土である。43はSK25、SD27からの破片と接合した。

SE24 (Fig.14, 図版6-(2))

北側低地部で検出した略円形の石組の井戸構を持つ井戸。規模は長径1.53m、短径1.35m、深さ111cmを測る。井戸は暗灰褐色粗砂礫まで掘り込んでいる。井戸底のレベルは8.2mを測る。上面から22~30cmぐらいから90cmの深さにかけて3~4段の石組を確認している。石の大きさは10~40cmで、花崗岩を中心とする転石を雜に積み上げている。また大きな石の間には長さ10cm程の小石を詰めている。特に最下段は大きな石でコの字に組んでいる。この石組の下は上面で44×50cmの円形を呈する、深さ30cmを測るピットがあり、井戸底である。曲物などの井筒は確認出来なかった。埋土は石組までは暗褐色粘質シルトで、石組内上層は黒褐色シルト、下層は暗灰褐色から黒褐色粘土で暗く粘性が強くなる。石組の裏込めは淡黒褐色粗砂礫と黒褐色粘土の混合層である。

出土遺物 (Fig.15, 図版10) 埋土上層や石組内から、土師器の高台杯や須恵質土器のすり鉢や滑石製品の破片、黒曜石の剝片が少量出土している。53は高台付杯1/3片で、復元口径18.3cm、器高5.1cm、復元底径9.3cmを測る。低く小さい高台がつく。器表は磨滅がひどく調整は不明。色調は淡赤橙からにおい黄褐色で、底部は内外黒ずんでいる。胎土は密で赤色粒子を含む。形態的には8世紀後半代のものに近い。54は須恵質土器の鉢底部1/3片。復元底径11.5cmを測る。体部から内底はナデ、外底部は糸切りで、仕上げはやや粗雑だが、指押さえやヘラ・布目痕が残る。色調は灰色、胎土は粗砂を少し含むが、焼成は良い。東播系のものか。55は方形の耳が付く石鍋の破片で、残存長15.5cm、幅8.4cm、厚み2.1cmを測る。外表面はノミでタテ方向に削られ、煤が付着する。内面は削りのちミガキで破損面は再加工を加えている。

53・55は石組井戸構内、54は石組裏込め内及び石組内出土である。

土坑

南側台地部を中心に確認しているが、主なものについて報告する。

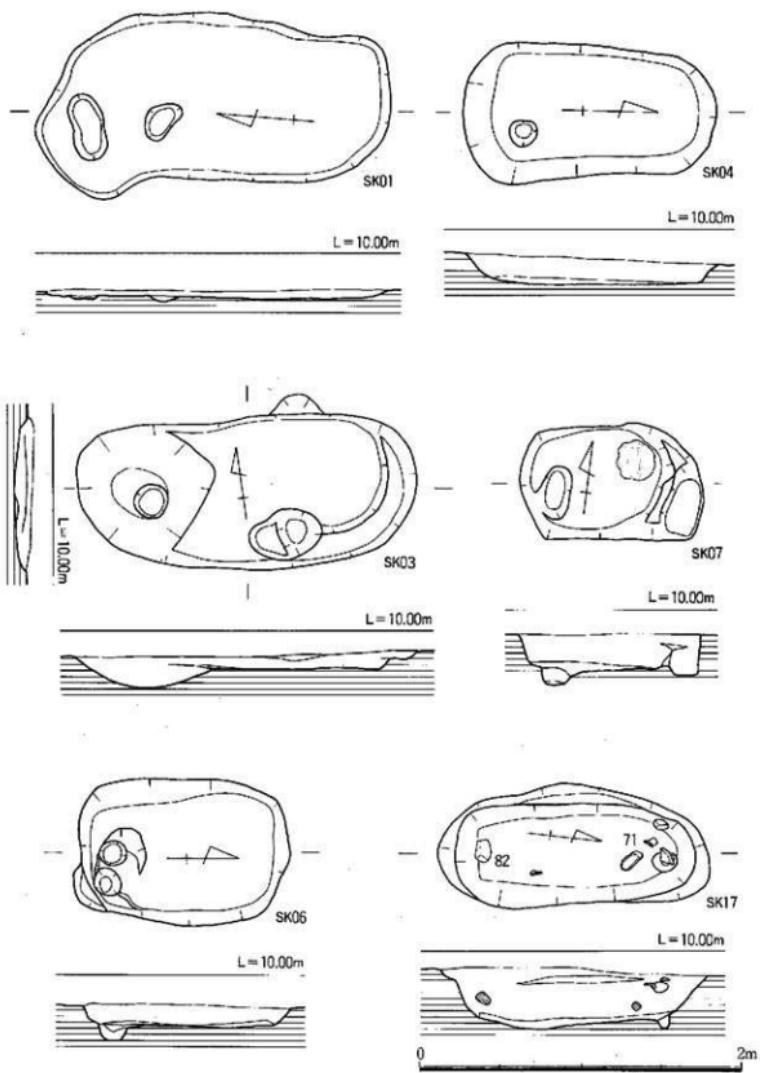


Fig.16 SK01・03・04・06・07・17 (1/30)

III 調査の記録

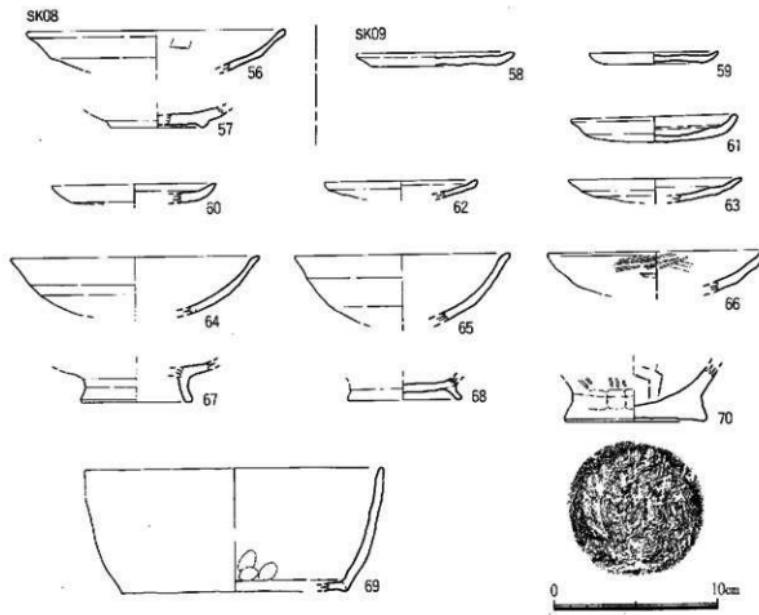


Fig.17 土坑出土遺物1 (1/3)

SK01 (Fig.16)

南西隅で検出した主軸を南北に取る細長い不定形の浅い土坑。規模は長軸2.20m、短軸1.16m、深さ5cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、北側に浅いピット状の窪みがある。埋土は暗褐色土である。

出土遺物 土師器から須恵器、中世の土師器。中国産青磁の細片が少量出土している。図示しうるものはない。

SK03 (Fig.16)

南西側、SA41の南で検出した主軸を東西に取る長楕円形の土坑。規模は長軸2.11m、短軸0.95m、深さ11cmを測る。底面は東側に狭いテラスを持ち、西側はピットで切られる。埋土は黒褐色土である。

出土遺物 土師器皿などの土器の細片、黒曜石剝片をわずかに含む。図示しうるものはない。

SK04 (Fig.16、図版7—(1))

南西側、SD05を切り、SB43と重複する主軸を南北に取る隅丸長方形の土坑。規模は長軸1.57m、短軸0.87m、深さ19cmを測る。短軸は南側が幅広く、北側がやや狭くなる。壁の立上りは緩く、底面は南側がわずかに深くなる。埋土は黒褐色と黄褐色粘質シルトの混合土である。

出土遺物 遺物は少なく、土師器皿や壺などの細片や黒曜石の剝片が少量出土している。

SK06 (Fig.16、図版7—(2))

SK04の西側で検出した主軸を南北に取る隅丸長方形の土坑。規模は長軸1.29m、短軸0.9m、深さ12cmを測る。壁の立上りはやや急で、底面は平坦である。南東隅にはピットが切り込む。埋土は黒褐色

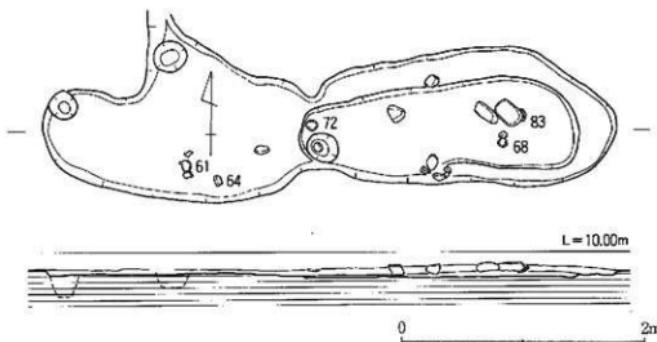


Fig. 18 SK09 (1/40)

と黄褐色の粘質シルトの混合土である。

出土遺物 土師器皿・环・高台付椀などや須恵器の破片、黒曜石の剥片が少量出土している。図示出来るものはない。

SK07 (Fig. 16, 図版 7-(3))

SB43の中で検出した主軸を東西に取る隅丸長方形の土坑。規模は長軸1.13m、短軸0.71m、深さ22cmを測る。北東側の上面に薄く焼土ブロック・炭化物が集中する部分がある。両端にピット状の落ち込みがあり、他遺構と切り合うのか。壁面の立上りは急で、底面はほぼ平坦。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 土師器の高台付椀などの細片と黒曜石の剥片を少量含む。図示しうるものはない。

SK08

図示していないが、直径は2~2.5mを測るが極めて浅く、地山の汚れか。

出土遺物 (Fig. 17) 黒色土器・内黒土器・土師器の椀片や黒曜石の剥片が少量出土している。56は土師器の壺口縁部1/8片で、復元口径15.8cmを測る。やや磨滅するが、内外面ナデ、内面には工具痕が残る。色調は浅黄褐色を呈し、胎土は精良。57は椀底部1/4片で、小さな高台が付く。磨滅がひどく調整は不明。

SK09 (Fig. 18, 図版 6-(3))

SB61と主軸を同一にする浅く不規則な長い溝状の土坑。長軸4.72m、短軸1.16~1.38m、深さ10cmを測る。底面はほぼ平坦である。底面には石片や礫石がいくつかあった。また埋土には若干炭化物を含む。なんらかの作業場に関連するものか。

出土遺物 (Fig. 17, 図版10) コンテナ1/2箱ほど出土した。須恵器、古代末頃の土師器・黒色土器・内黒土器などや、黒曜石の剥片などがある。58~63は土師器の小皿である。それぞれ1/2片・1/2片・1/6片・ほぼ完形・1/6片・1/4片で、復元口径は9.6cm・8cm・10cm・10.2cm・9.4cm・10.6cmを、器高は0.8cm・0.7cm・1.2cm・1.7cm・約1.2cm・1.5cmを測る。形態は58~60の底部は平坦、61・62・63の底部はへら切りでやや丸底を呈す。調整は磨滅がひどいがナデ。61の口縁部の一部は煤が付き、燈火皿か。64は土師器の椀1/5片。復元口径15cmを測る。口縁端部はわずかに外反する。器表は磨滅がひどいがナデ。胎土は精良で焼成も良い。65は内黒土器椀1/4片。復元口径は約13cm余りを測る。内外面ナ

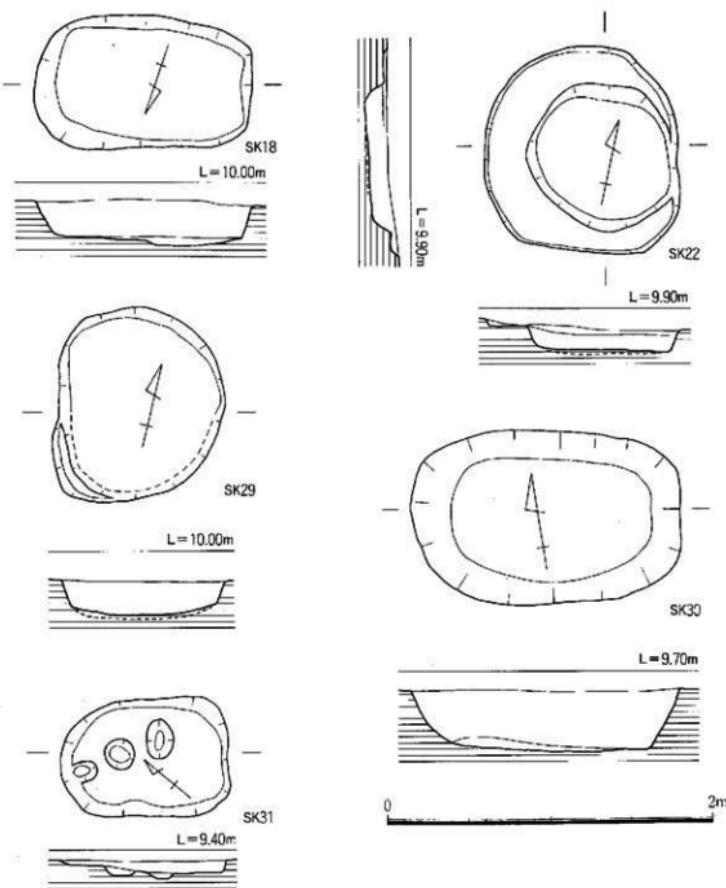


Fig.19 SK18・22・29～31 (1/30)

で、外面は指押さえ痕が残る。口縁端部はやや丸みを帯び外反する。66は黒色土器の环1/6片である。復元口径は13.4cmぐらいである。やや磨滅するが内外面ヘラ磨きか。胎土は良い。色調は65が外面浅黄橙色、内面は灰黒色を呈し、66は灰黒色を呈する。胎土は66が稍良。67・68は土師器の高台部分。67は1/4片で復元高台径6.8cm、68は7cmを測る。67は高台高が1.5cmと高い。調整はナデで、68の外底部はヘラ調整である。69は平底の鉢か。1/6片で、復元口径18.3cm、器表は磨滅がひどいがナデか。体部内面下半に指押さえ痕が残る。外面色調はよい黄橙色である。70は縄文晩期から弥生前期

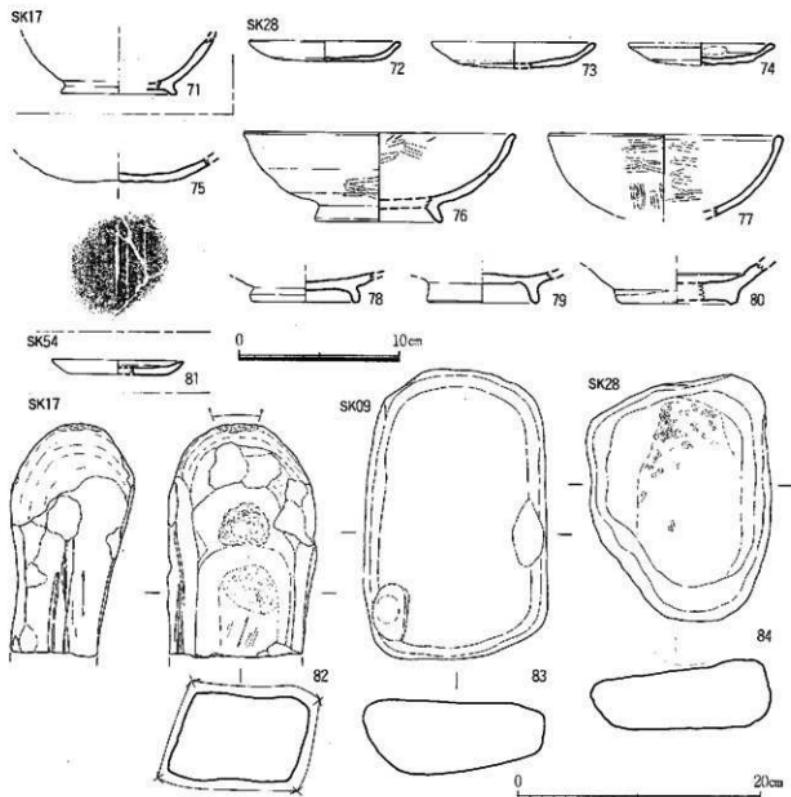


Fig.20 土坑出土遺物 2 (1/3・1/4)

初めの土器の底部片。底部はわずかに上げ底で、底径8.8cmを測る。外底部、外面は条痕が残る。色調はよい黄橙色で、胎土は粗砂を多く含む。焼成は良い。83は石斧で、長方形状の扁平な花崗岩の軽石を利用している。最大長25cm、幅15cmを測る。上面には明瞭な使用痕は認められない。

SK17 (Fig.16, 図版7-4))

中央部で検出した主軸を略南北に取る隔丸長方形の土坑。規模は長軸で1.69m、短軸0.77m、深さは38cmを測る。壁面は二段掘り状で断面は舟底状を呈し、底面は南側に向かってわずかに深くなる。両端に砾石が床面よりやや浮いて出土している。埋土は黒褐色粘質土で、下層にかけては黒色で灰や炭化物を含む。火葬墓などの墓の可能性がある。

出土遺物 (Fig.20) 土師器や黒色土器の細片や黒曜石の剝片が出土している。71は土師器碗1/5片である。復元高台径は7cmを測る。高台は低く外に開く。やや磨滅するが内外面ナデで、外面に指押さえ痕が残る。胎土は精良、焼成も良い。82は目の粗い砂岩製砾石片。現存長14.2cm、幅9.1cm、厚

III 調査の記録

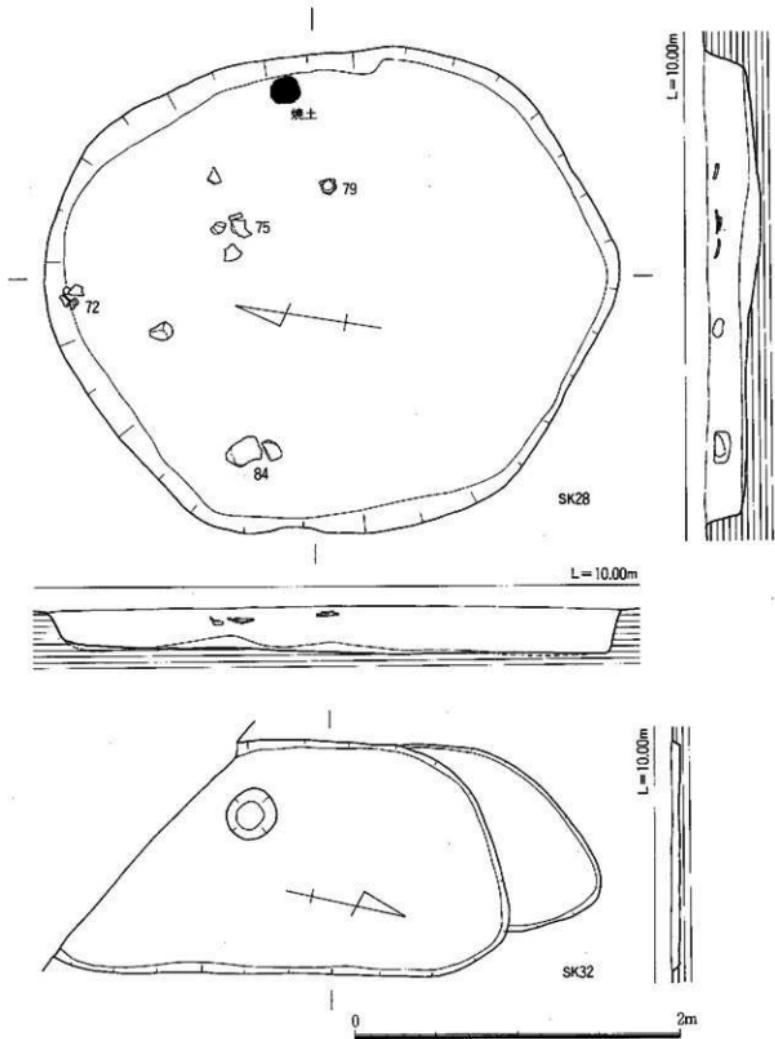


Fig. 21 SK28・32 (1/30)

さ5.7cmを測る。上下・左右四面を使用している。砾石以外にも使用されたのか、一部敲打使用痕跡が残る。

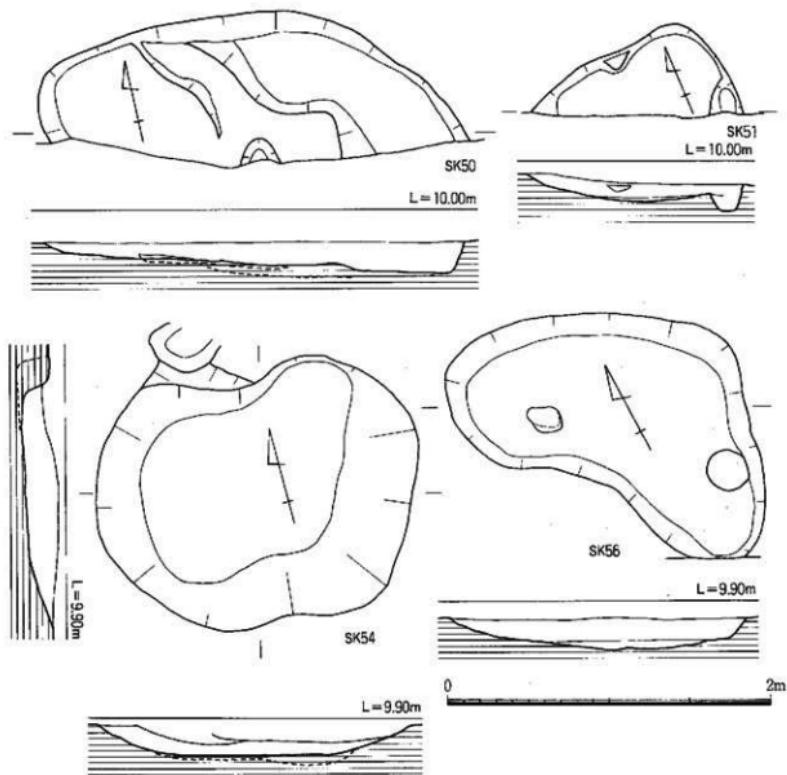


Fig. 22 SK50・51・54・56 (1/30)

SK18 (Fig. 19, 図版 7-(5))

SK17の南側で検出した主軸を略東西に取る隅丸長方形の土坑。規模は長軸1.33m、短軸0.83m、深さ25cmを測る。壁の立上りはやや急で断面は逆台形を呈し、底面は一部掘り過ぎているが、ほぼ平坦である。埋土は黒褐色土である。形態から見て墓坑のようなものか。

出土遺物 土師器の皿・甕、白磁の細片が少量出土している。図示出来るものはない。

SK22 (Fig. 19)

南半東側で検出した四角ばった略円形の土坑。規模は長径1.20m、短径1.29m、深さ18cmを測る。南北・西側に幅10~25cmほどのテラスを持つ。壁の立上りは直に近く、底面のレベルは北側にやや傾斜を持つ。埋土は暗灰褐色土を呈す。

出土遺物 器台や内黒土器・黑色土器・土師器片や黒曜石の剝片が少量出土している。図示出来る

ものはない。

SK28 (Fig.21、図版6-(4))

南東隅で検出した略六角形を呈す大型の土坑。規模は長径3.54m、短径3.0m、深さ34cmを測る。底面は東側に向かって緩く深くなる。埋土は暗灰から褐色シルトで、東側下層は黒褐色粘質シルトとなる。上層に少し炭化物・焼土を含み、東壁際の上面に焼土の面がある。砾石や作業台石が出土しており、作業場のような機能を持った土坑か。

出土遺物 (Fig.20、図版10) 土師器の皿・碗・杯や黒色土器碗、中国産白磁などの破片や砾石・作業台石、黒曜石の剝片などが出土している。72~74は土師器の小皿。残存率はほぼ完存・1/4片・1/4片で、口径は9.3cm・復元10cm・復元8.9cmを、器高はいずれも1.3cmを測る。底部はやや丸底で、74の底部はヘラ切りである。器壁はやや磨滅するがナデ。胎土は73が精良で、焼成はいずれも良い。72はSK09出土の破片と接合した。75は土師器環底部片。器壁は磨滅がひどいがナデで、底部に板状圧痕が残る。76・77は黒色土器碗である。1/2片、口縁から底部1/3片で、口径は復元で16.6cm・14.4cmを測り、器高は76が5.4cmを測る。いずれも内外へラ研磨で高台部はナデ。色調は濃い灰黒色で、77は胎土が精良で、焼成も良い。78はSP125出土の破片と接合した。78・79は碗の高台部片。78は内黒土器、79は黒色土器の破片である。内底見込みはヘラミガキ、高台部はナデ。79の胎土は精良、焼成はいずれも良い。80は白磁碗IV 2類の底部1/4片。復元高台径は7.4cmを測る。84は作業台石と思われる扁平な石である。最大長20.4cm、最大幅15.2cmを測る。上面には使用痕らしき、凹凸が一面に残り、各側面にも打撃調整痕が残る。石材は白色の花崗岩である。

SK29 (Fig.19、図版7-(6))

南側の東壁境界で検出した丸みを持った五角形状を呈する土坑。規模は長径1.20m、短径1.07m、深さ20cmを測る。断面は舟底形で中央部がやや深くなる。埋土は上から暗灰褐色粘質シルト、暗褐色シルト、黒灰褐色粘質シルトで、下層には炭化物を少量含む。

出土遺物 土師器や内黒土器片などや繩文土器の細片や黒曜石の剝片が少量出土している。図示できるものはない。

SK30 (Fig.19)

中央段落ち下で検出した主軸を東西に取る隅丸長方形状の土坑。規模は長軸1.67m、短軸1.09m、深さ38cmを測る。断面は逆台形を呈し、東側に少し深くなる。埋土は黄褐色粘質土ブロックと灰褐色疊混じり粗砂の混合である。

出土遺物 土師器や須恵器の細片が少量出土している。図示出来るものはない。

SK31 (Fig.19)

SK30の北側で検出した隅丸長方形状を呈する土坑。規模は長軸1.04m、短軸0.74m、深さ10cmを測り、遺構の残りはあまり良くない。南側に向かってやや深くなる。底面にはピットが3個ある。埋土は黄褐色シルトで粗砂を含む。出土遺物はない。

SK32 (Fig.21)

南東隅境界にかかるて検出した南北に主軸を取る隅丸長方形状の土坑。北側は他遺構と切り合う。規模は長軸2.8m、短軸1.44m、深さ6cmを測り、遺構の残りはあまり良くない。底面は平坦である。埋土は黒褐色粘質土で黄褐色地山ブロックを含む。

出土遺物 土師器や内黒土器を含む土器片が少量出土しているが、図示出来るものはない。

SK33 (Fig.22)

南東隅、南壁境界地で検出した不定形の土坑。現存長2.66m、幅0.97m、深さ15cmを測る。底面は東

側に向かって階段状に深くなる。埋土は淡黒褐色粘質シルトである。

出土遺物 純文土器や土師器の細片や黒曜石の剥片が少量出土しているが、図示出来るものはない。
SK51 (Fig.22)

南東隅、南壁境界にかかるて、SK51の西側で検出した隅丸長方形状の土坑。確認長1.32m、幅0.56m、深さ17cmを測る。底面は中央が深くなり、東壁がピット状に深くなる。埋土は黒褐色粘質シルトである。出土遺物は土師器の細片が2点出土している。

SK54 (Fig.22、図版7-7)

SE16に切られる不定形の土坑。規模は長径2m、短径1.72m、深さ20cmを測る。断面は皿状で、浅く緩やかである。粗砂礫の地山の上面にあった暗褐色砂を取り除いて検出した。

出土遺物 (Fig. 20) 土師器の皿や壺・黑色土器の細片が少量出土している。**80**は土師器皿1/8片で、復元口径は約8cmを測る。調整はナデ。

SK56 (Fig.22、図版7-8)

南壁境界地で検出した「へ」字状を呈す不定形の土坑。SB59に切られる。最大長2.2m、最大幅1.16m、深さ22cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。

出土遺物 土師器の皿片や黒曜石の剥片が少量出土している。

溝状構造

番号を付したものは10条あるが、同一のものと思われるものもあり、主なものについて述べる。

SD02 (付図1)

南西隅で検出した南北方向の小溝で、SB43を切る。確認長さ6.2m、幅0.3~0.6m、深さ5cmを測る。埋土は、黒褐色土である。

出土遺物 (Fig.23、図版11) 土師器の皿・壺・鍋・高台付椀、須恵器の壺口縁部片や中国産青磁皿などを少量含む。**85**は土師器碗口縁部1/8片で、復元口径14.7cmを測る。器壁は磨滅がひどく調整は不明。胎土は緻密。**86**は中国の同安窯系の青磁皿底部少片。薄いオリーブ灰色の胎が薄くかかり、表面には水裂が入る。胎土は灰白色で精良。**87**は土師器の鍋口縁部細片。口縁端部はやや肥厚し、外面はナデでハケが残り、指押さえ痕があり、内面はヨコハケ。焼成は良い。**88**は須恵器の口縁部1/10片。復元口径は約13cmを測る。色調は暗青灰色を呈し、胎土は精良、焼成は良い。壺などの口縁と考るが、脚の可能性もある。やや瓦質に近い焼きである。

SD05 (付図1)

南西隅で検出した、東西方向の浅い小溝。SK04・06に切られる。確認全長は5.6m、深さ3~9cmを測る。埋土は暗褐色から黒褐色土で黄灰色地山シルトを含む。

出土遺物 土師器の皿や黒色土器の細片を少量含む。図示出来るものはない。

SD11・12 (付図1、図版8-1)

南側高所部下縁辺を西から東に蛇行しながら流れる浅い溝である。東側はSD12・SD27につながっていくと思われるが、表面では切り合ひ関係が確認出来る。埋土の違いかもしれないが、時期的な流れの違いがあると思われる。一応SD12合わせて報告する。幅は1~1.5m、深さは10~40cmを測り、定していい。埋土は暗灰褐色シルトに灰褐色粗砂・灰色細砂の混合で、底面には鉄分が沈着し、硬く締まっている。埋土中には小さな礫石や磨滅した土器片が流れ込んでいる。高所部下を断続的に流れる自然流路であろうか。

出土遺物 (Fig.23) 埋土中から古墳時代の土師器や須恵器片、古代から中世の土師器片、瓦器片、少量の中国産の白磁片・青磁片、黒曜石の剥片などが出土している。いずれも細片が多く、図示

III 調査の記録

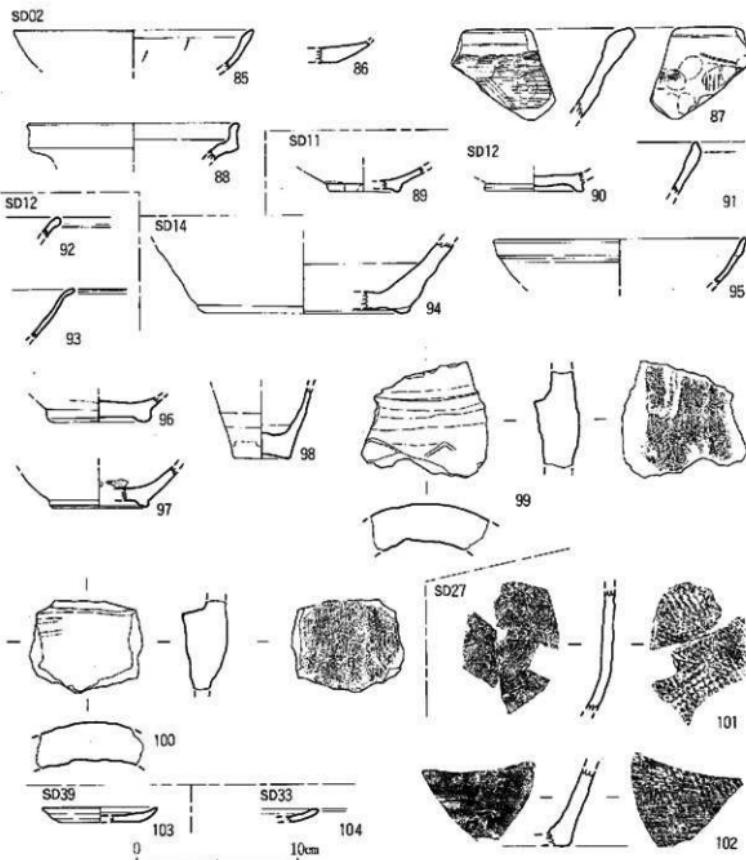


Fig.23 溝出土遺物 1 (1/3)

出来るものは少ない。89はSD11部分から出土した白磁高台部1/8片で、器種は皿か。復元高台径は4.4 cmを測る。高台部は露胎。釉は黄味を帯び、発色はよくない。90～93はSD12部分出土。90黒色土器碗底部2/3片。復元高台径は約6 cmを測る。90は上師質土器碗の口縁部細片。91は白磁の口縁部細片。11端部は丸みを持つ。92は青磁碗口縁部細片で、越州窯青磁か。

SD13 (付図1)

SD11から分岐して東に15mほど真っ直ぐ延びる小溝である。幅も小さく、断面の浅い溝である。埋土の上層は暗灰色シルトまたは細砂で、埋土から見て、新しい時期のものか。

出土遺物 古墳時代の土師器・須恵器、中世の土師器、中国産青磁の破片、近世の染付や陶器、黒

曜石の剥片などを少量含むが、いずれも細片で、図示できるものはない。

SD14 (付図1、図版8-(2))

低地部SD11の北側を東西に真っ直ぐ延びる小溝である。東西方向の建物と大体主軸が同じである。確認規模は約17.2m、幅0.4~1m、深さ10~17cmを測る。断面は浅いU字形を呈し、埋土の上層は灰褐色粗砂で、下層は灰色粘土で底近くは鉄分が沈着し、硬く締まる。溝内には大量の小砾とその中に混じて磨滅し鉄分が付着した遺物を含む。SA60と直交しており、集落を区画する溝であろうか。

出土遺物 (Fig.23・24、図版11)
礎群中から、古墳時代から古代にかけての土師器・須恵器や少數の須恵質土器・中国産白磁や陶器片、瓦の破片、黒曜石の剥片などが出土している。

94は須恵質土器鉢底部1/6片。復元底

径13cmを測る。外底は雑な仕上げだが、わずかに高台状を呈す。体部内外面はナデ。胎土は砂粒を多く含み、やや粗い。95・96は白磁碗。95は白磁II類の山縁部1/6片で、復元口径15.4cmを測る。口縁部は細い玉縁状を呈し、内外薄めのややオリーブ色を呈する釉がかかる。胎土は灰白色で、黒色粒子を少し含む。96は白磁IV類の底部1/2片で、復元底径6.5cmを測る。高台は削り出しで、疊付は擦っている。高台は施釉しないが、その他はやや不透明な淡灰色釉をかける。97は越州窯青磁碗の底部1/3片である。復元高台径6.2cmを測る。高台全面にオリーブ黄色の釉がかかるが、疊付は釉を搔きとる。内底に粘上目痕が残る。98は瓶か壺の底部片、復元底径3.4cmを測る。外底は上げ底で露胎、水引き痕が残る。外面白い化粧上がり、浅黄~白色のオリーブ釉がかかる。99・100は須恵質の丸瓦細片。筒部凸面には叩き痕、凹面には細かい布目痕が残る。105は打製の剥片で、削器であろうか。全長6.1cm、幅3.9cmを測り、断面は略三角形を呈す。石材は安山岩系であろうか。

SD27 (付図1)

SD11・12から断続的に連なる溝で東側境界まで延びる。西側はSD39、東側はSD36を含む。規模は幅0.8~1.4m、深さ約5~30cmを測り、埋土は灰色粗砂またはシルトである。緩く蛇行して底も凸凹を呈し、SD11と同様の自然流路であろう。

出土遺物 (Fig.23・24、図版11) 土師器・須恵器の細片や黒曜石の石片が少量と青磁の細片が1点出土している。図示出来ないが、一部の須恵器の破片はSK09と接合した。101・102は同一個体と思われる須恵器甕の体部片。外面は格子目タタキのちナデ、底部近くは工具による強いヨコナデ。内面はナデで布目痕が残る。胎土は精良。時期的には古代以降で、他にも同一個体の破片が出土している。103はSD39部分から出土の土師器皿1/2片。復元口径は約7cmほどか。磨滅がひどく調整は不明。106は磨石。一部欠損するが、全長13.2cm、幅9.3cmを測る。全面擦られて磨滅し、両先端は使用による打撃

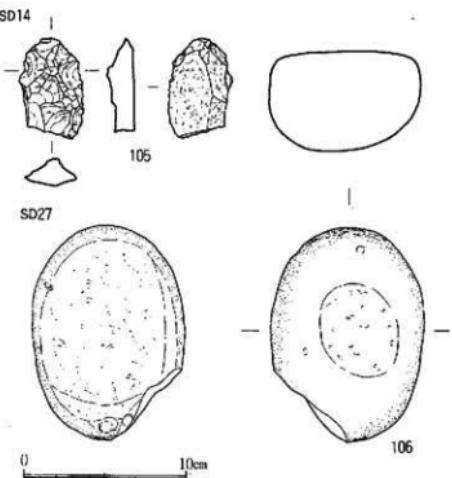


Fig.24 溝出土遺物2 (1/3)

III 考査の記録

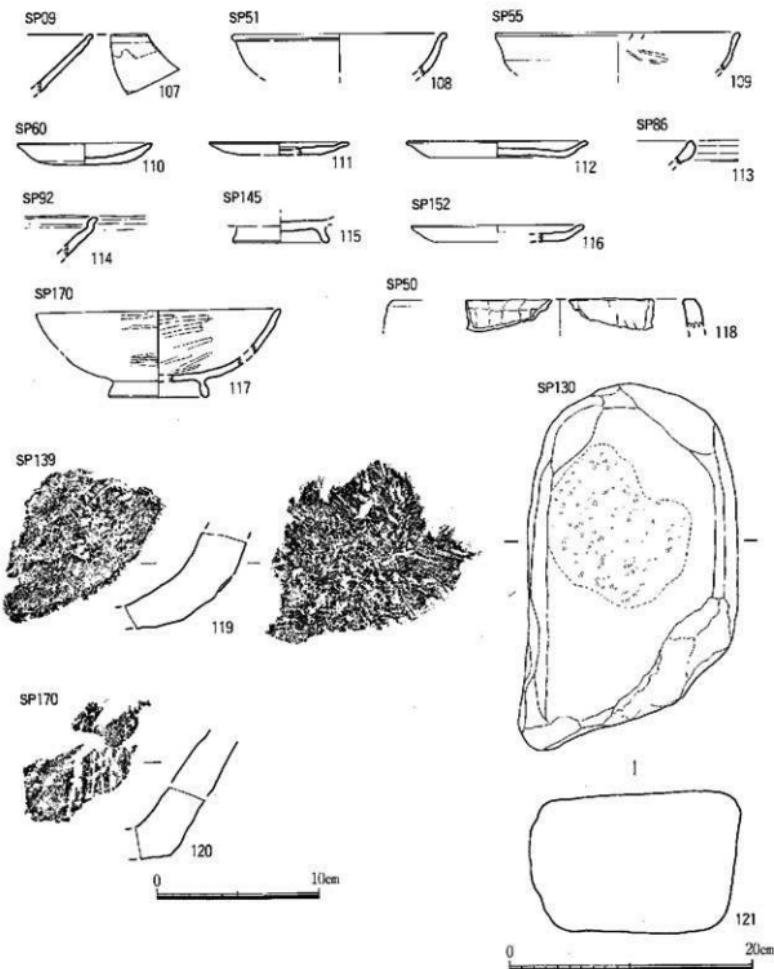


Fig.25 ピット出土遺物 1 (1/3・1/4)

痕が残る。石材は灰色を呈す玄武岩である。

SD33 (付図 1)

SA60の東側に並行する小溝。規模は全長約6.3m、幅0.18~0.36m、深さ5~8cmを測る。埋土は暗灰褐色シルトである。橋と関係がある溝か。

出土遺物 (Fig.23) 土器片や黒曜石の剥片が少量出土。104は土師器皿小片。表面は磨滅する。

ピット出土遺物 (Fig. 25・26、図版II)

各ピットから遺物が少量の遺物が出土している。大半が細片で図示出来るものは少ないが、主なものを報告する。**107**はSP9出土の白磁碗口縁部小片。0-II類であろうか。**108**はSP51出土の土師器楕口縁部1/8片で、復元口径は13.2cmを測る。器表は磨滅がひどく、調整は不明。胎土に砂粒を含む。**109**はSP55出土の土師器楕口縁部1/8片である。器表はやや磨滅するがナデで、内面工具痕が残る。**110**~**112**はSP60出土。土師器皿小片で、復元口径は8.2cm・8.6cm・11.2cm、器高は1.3cm・0.8cm・1.1cmを測る。磨滅がひどいが、底部はヘラ切りと思われる。**113**はSP86出土の玉縁口縁の白磁碗細片。釉の発色は余り良くない。**114**はSP92出土の縄文土器浅鉢口縁部細片。胎土・焼成とも良い。**115**はSP145出土。土師器楕の高台部1/6片である。器表は磨滅している。**116**はSP152出土。土師器皿1/4片で、復元口径は10.6cmを測る。調整はナデ。**117**は黒色土器楕の口縁部と底部片。口径は15cmぐらいか。胎土は精良である。**118**~**120**は滑石製の石鍋片。**118**はSP50出土の口縁部細片。外面煤が付着する。**119**~**120**は底部片で**119**はSP139出土、**120**はSP170出土である。いずれもノミ状の工具痕が残り、**119**の器表には煤が付着する。**121**はSP130出土の板石に利用されたと思われる花崗岩の石材。全長30.1cm、最大幅18cmを測る。上下両面は平坦で、上面には打撃痕らしき痕跡と焼けたような痕跡がある。**122**~**124**は鉄製品。**122**はSP163出土でカスガイの破片か。**124**はSP182出土。下端が三角形状を呈し、それに断面方形の長い柄が付く形態。全長8cmを測る。釘の類であろう。

その他の遺構遺物 (Fig. 28)

SXとした遺構出土の遺物で主なものについて述べる。**125**はSX34出土の縄文土器の鉢と思われる口縁部細片。ナデで5条の沈線がある。晩期前半頃である。**133**はSX48出土の越州窑青磁と思われる口縁

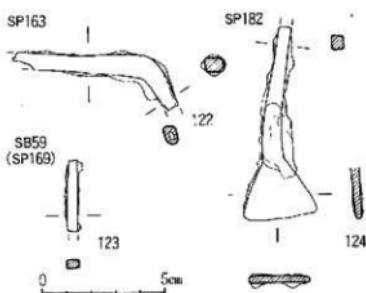


Fig. 26 ピット出土遺物 2 (1/2)

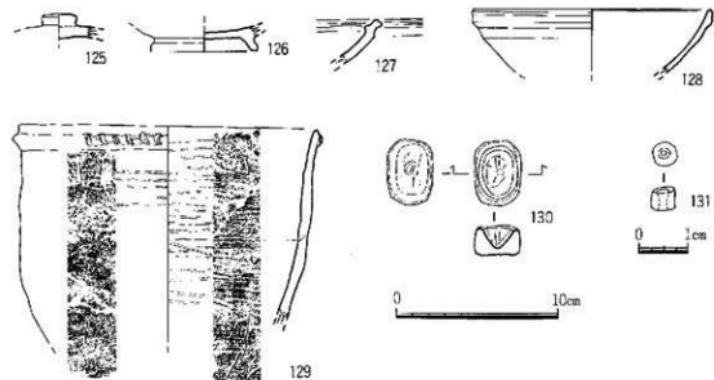


Fig. 27 遺構面出土遺物 (1/3 - 1/1)

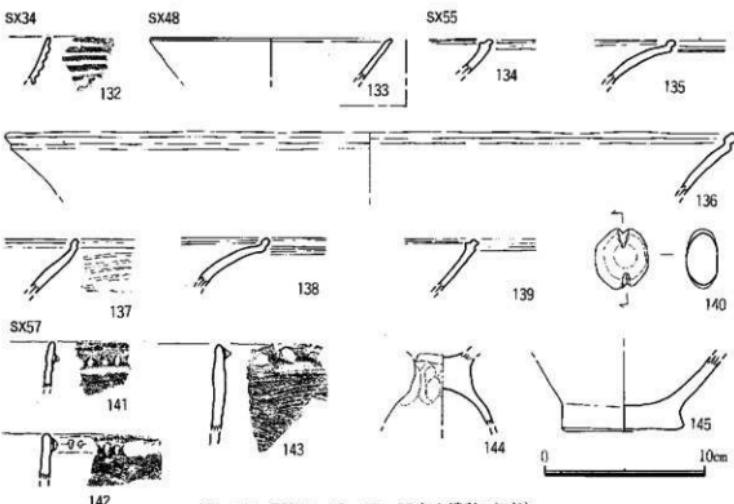


Fig. 28 SX34・48・55・57出土遺物 (1/3)

部細片。口径は15cmと推定される。器表にはオリーブ黄の釉がかかり、水裂がはいる。

第1造構面出土遺物 (Fig. 27, 図版11)

125は須恵器蓋つまみ片。焼きは悪いが胎土は良い。126は黒色土器片。高台径は6.6cmを測る。やや磨滅するがヘラミガキか。127は縄文土器の精製の浅鉢口縁部細片。器表は磨滅し不明。128は白磁碗口縁部片、口縁は細い玉縁状を呈す。オリーブ色がかった薄い釉がかかるが、表面には水裂が入り、ピンホール状の小さな穴が多く入る。129は刻目突帯文土器の甕で底部を欠く。造構面の土中から倒立した状況で出土した。口径18.4cmを測る。器表はやや磨滅するが内外横方向の条痕である。130は小型の隅丸方形を呈す滑石製品の容器。長径4cm、幅2.8cm、厚み1.6cmを測る。上面はノミですり鉢状に彫られ、仕上げに磨かれている。131はガラス小玉。青緑色を呈す。直徑5mm、厚み4~5mm、2cm前後を測る。いずれも南側高所部からの出土である。

3. 第2面の調査

第1面の南側高所部造構面中及び、西壁に設定したトレーニングで遺物と落ち込みを確認したので、第1次調査区の例から弥生時代の造構面の存在を予想して、一部人力掘削と機械掘削で20cm前後を掘り下げて、造構の確認を行った。その結果南側高所部では上面のピットの掘り残しと低地部西壁沿い (SX57) と高所部東壁沿い (SX55) を確認した。それぞれの落ち込みについて述べる。

SX55 (付図2、図版9-(1))

南東隅、東壁にかかって検出した確認長28m以上、幅8m以上、深さ80cmほどを測る。埋土は上層から暗灰褐色粘質シルトを主体とし、砂を間層に挟み、下層は黄褐色粘土ブロックを含む。底部は湧水があった。壁はだらだらしており、全体を確認していないことから明確な造構とは考えにくい。

出土遺物 (Fig. 28, 図版11) 遺物は上層では土師器らしきものから縄文土器片、下層は縄文土器片を含むが、大半が細片で種類が不明のものも多い。ほかに黒曜石の剝片、石錐、上層からは鉄滓が

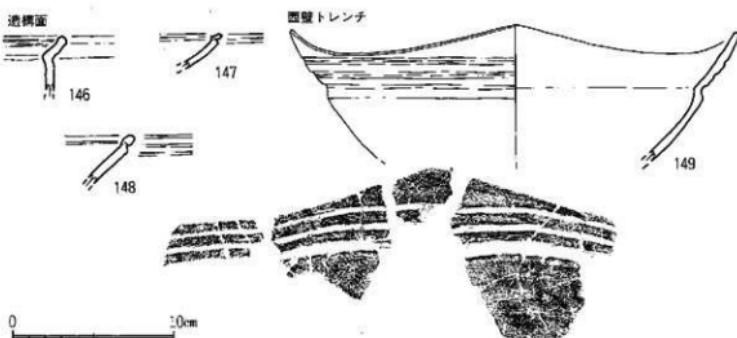


Fig.29 第2面及びトレンチ出土遺物 (1/3)

出土している。134～139までは縄文時代晩期の黒川並行期頃の浅鉢の口縁部片。口唇部内外面に沈線が巡るものや、口唇部が内折し更に外折する器形がある。136は大型の浅鉢口縁部1/8片で、口径は推定で45cmぐらいの大型品である。器表面は磨滅しているが、横方向のミガキと思われる。色調はにぶい黄褐色である。その他のものも表面は磨滅するものも、ミガキと思われる。134・135は上層、136・137は中層、138は下層出土である。140は上層で出土し扁平な円形を呈する石錐。長径3.7cm、短径3.2cm、厚さ1.9cmを測る。両端に紐掛け用の刻みがある。灰色を呈する玄武岩か。

SX57 (付図2)

調査区西壁で検出した不定形の落ち込みで、確認長22m、幅7mを測り、底面は凹凸が激しく、最大の深さは80cmほどを測る。埋土は上層が暗灰褐色粘土、下層が暗褐色粘土を主体とし炭化物を含む。

出土遺物 (Fig.28) 余り遺物の出七はないが、土師器らしきものから縄文土器片や黒曜石の剝片などを含み、丹塗り研磨の壺形土器の碎片を含む。141～143は刻目交帯文土器の口縁部片、刻目を持つ突帯が口縁部直下に付くものと、ややドに付くものがある。調整はヘラミガキ。144は高杯の脚部片か。外面指オサエ痕が残り、黒斑がある。上下逆の可能性もある。145は体形土器の底部片か。底径7.4cmを測る。器表は磨滅がひどく調整は不明。内面には煤が付着する。色調は浅黄褐色、胎土は砂粒を多く含む。

第2面及びトレンチ出土遺物 (Fig.29、図版11)

146～149はいずれも縄文晩期の縄文土器である。146～149は細片のため器形の復元はやや難があるが、浅鉢の口縁部片と思われる。磨滅がひどく調整は不明。晩期の黒川並行期頃のもの。149は前半頃の波状II線を持つ精製の浅鉢である。復元口径は27.5cm余りである。II線外面上に3条の沈線が巡る。調整は外面横ヘラミガキ、内面は黒色研磨である。焼成は良い。146・147は第2造構面、148・149は西壁トレンチ出土である。

剥片石器類について (Fig.30)

次郎丸第2次調査では、多くの剥片石器類が出土した。遺物は各遺構や包含層からの出上であり、総数は906点ある。このうち約三分の一にあたる322点がSX55から出土している。剥片石器類の内容は、石鎌およびその未製品9点、削器等二次調整有る剝片5点、石核24点、剝片515点、碎片353点である。なお石材は黒曜石900点、古銅輝石安山岩6点と、圧倒的に黒曜石が多い。また黒曜石には不純物を含む粗雑な石材が目立つ。なお、剝片には背面の自然面が50%以上占めるものが85点あり、遺跡内での原石からの剝離作業が推定される。剝片剝離技術は縦長剝片剝離を主体とし、不定形剝片剝離を含むが、両者は同一の石器群に含まれるものとみられた。縦長剝離は各調整剝離が不十分で、不規則なものであるが、くさび形を呈する剝離作業は認められない。以下に代表的な石器を示す。

150～155は石鎌と未製品である。全て黒曜石の剝片を用いる。150は縦長剝片を用い長さ2.5cm、幅1.5cm、厚さ0.4cmを測る。151は片脚を欠損し、長さ1.9cm、幅1.4cm、厚さ0.4cmを測る。152は自然面の残る不定形剝片を用い長さ1.9cm、幅1.5cm、厚さ0.2cmを測る。153は先端、片脚を欠損し長さ2.5cm、幅1.5cm、厚さ0.4cmを測る。154は未製品で長さ2.5cm、幅1.7cm、厚さ0.7cmを測る。155は未製品で長さ2.4cm、幅1.9cm、厚さ0.7cmを測る。156は削器である。黒曜石の縦長剝片の両側辺と先端に二次調整を施す。長さ3.9cm、幅1.8cm、厚さ0.7cmを測る。157は搔器である。古銅輝石安山岩の縦長剝片の先端に二次調整を施す。長さ3.8cm、幅3.9cm、厚さ1.2cmを測る。151、153、157はSX55、152はSD11、156はSD12、他は遺構面の包含層から出土した。

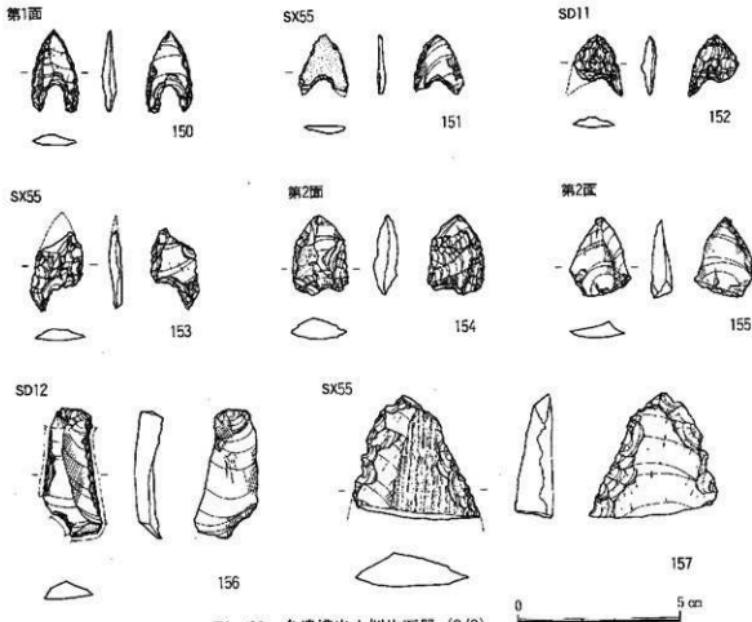


Fig. 30 各遺構出土剝片石器 (2/3)

4. 小結

今回の調査の成果のまとめを簡単に述べる。検出した遺構の時期は古代末から中世前半期の時期を中心で、第1次調査で検出したような、弥生時代から古墳時代の遺構は確認出来なかつた。また遺物もほとんど出土していない。おそらくこの時期の集落は西から南の一帯にあるのであろう。ただ遺跡の時期については、中世の造構面中やその下から検出した不定形の落ち込み状の遺構から、縄文時代晚期前半から後半の突堤文土器時代の遺物が少量ではあるが出土している。扇状地や微高地に集落が立地する、早良平野の中・上流域の縄文時代の遺跡立地の在り方と同様であり、周辺に晚期の遺構が存在する可能性がある。

上面の遺構で古い時期の遺構は11世紀代から12世紀前半の時期で、白磁や底部ヘラ切りで丸底の环などを含む。まだ底部糸切りの技法が出現しない時期である。北側低地部の井戸 S E 23・24や遺物が接合した S K 09と S K 28などが含まれる。

新しい時期は底部糸切り底の七師器や青磁を含む時代である。12世紀中頃～13世紀代の時期で、S E 16やS K 17、S D 02・11・12などである。S D 05なども S D 02と直交し同時期の可能性がある。S K 04・06などは S D 05を切るので若干新しい時期のものもある。

次に建物群についてであるが、第1次から3次の調査で、合計22棟の建物が検出されている。時期については遺物が少ないので決めていく。第3次調査報告では古代末から中世の時期と報告されているが、第1次調査報告では12世紀から16世紀迄の時期軸が設定されており、第2次調査よりは新しい時代まで集落が継続するようである。今回は第2次調査の成果を基にそれらを整理して、次郎丸遺跡での中世集落の在り方について考えたい。

第2次調査では東西主軸のもの5棟、南北主軸のもの1棟、磁北方位で2×2間もの1棟が検出された。東西棟はいずれも2×3間の規模で、周囲に庇をめぐらしている。規模としては身舎の部分で桁行き全長5.71～6.7m、梁行き全長3.4～3.97m、身舎面積は21～25m²を測る。同様の規模の建物は北東1kmほど離れた原遺跡第10次調査地点や南側1kmほど離れた田村遺跡でも検出されている。原遺跡の建物は12～13世紀代で次郎丸遺跡とはほぼ同時期である。田村遺跡の建物群の時期は平安時代から鎌倉時代で、総数200棟を超える建物が検出されている。これらの建物群は野芥荘の莊園の一部ではないかと考えられている。建物群は基本的には早良地域の復元条里方向に沿うものであり、調査区東側の道路も区割りに沿うものである。建物群は重複関係や主軸方向から大きく3時期ぐらに分かれる。

I類は第2次調査の櫛 S A 60に方向性があうもの。主軸方位としては東西・南北よりわずかに北と西に振れる。第2次調査のS B 10・43・61・S A 42、第3次調査の第23号建物などが該当する。

II類はほぼ磁北方向を取るもので、第2次調査のS B 44・45・46、第3次調査の第20・22・23号建物などが該当する。

III類は第2次調査のS B 59・S A 35・41などで、上記の2類に比べ主軸の振れが大きい。S A 35などは地形に合わせている可能性がある。

各建物群の時期については、各遺構同士の重複関係や出土遺物から見て、I類がII類に先行するようである。I類は出土遺物などから、S D 14・S E 23・24やS K 29・28などとはほぼ同時期12世紀中頃までか。II類はS E 16を建物が切ることから、12世紀後半から13世紀頃の時期か。III類については時期を決めうる遺物がないが、I・II類に近い時期であろう。また第1次調査でも南北棟と東西棟の建物群で構成されているが、2×3間の庇を巡らす建物がなく、替わりに2×2間の隣柱の建物や1×2間の建物があるなど、建物の様相がやや異なっている。ただ遺物から見る限り、違いは見られず、普通の一般的な集落遺跡であろう。

III 調査の記録

これらの建物群の主軸方向は田村遺跡第5次調査で検出された100棟を超える建物群と同じ方向である。第5次調査では、磁北を中心とするものや、最大で10°前後西偏するものなどで4期に大分類している。時期的には11~14世紀の集落とされ、沖積地の新田・居住地の開発による集落とされている。次郎丸遺跡もまさに同時期の遺跡であり、室見川周辺の洪水にさらされる不安定な場所とはいえ、微高地上に立地し、農業技術の進歩によって周辺の低湿地を開発し水田化していったのであろう。早良平野南部の清末遺跡の第2次調査でも、12~14世紀にかけての条里に伴う溝と堀に囲まれた居館が検出されており、中世の新田開発に伴う集落と考えられている。

註

- ①福岡市教育委員会「福岡外環状線道路関係埋蔵文化財調査報告一 1-」福岡市埋蔵文化財調査報告書第467集 1996
- ②福岡市教育委員会「次郎丸遺跡 I」福岡市埋蔵文化財調査報告書第468集 1996
- ③福岡市教育委員会「原遺跡 3」福岡市埋蔵文化財調査報告書第215集 1990
- ④福岡市教育委員会「田村遺跡 V」福岡市埋蔵文化財調査報告書第192集 1988
- ⑤福岡市教育委員会「入部III」福岡市埋蔵文化財調査報告書第310集 1992

図 版



発掘調査作業風景

図版 1



調査区全景（南から）



(1)調査区南西側



(2)調査区北側

図版 3

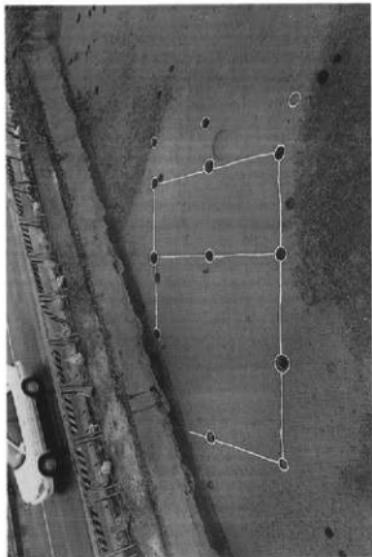


(1)調査区南東面（南東から）

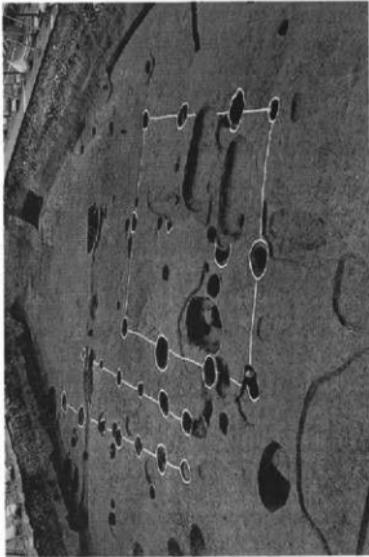


(2)調査区南東隅（西から）

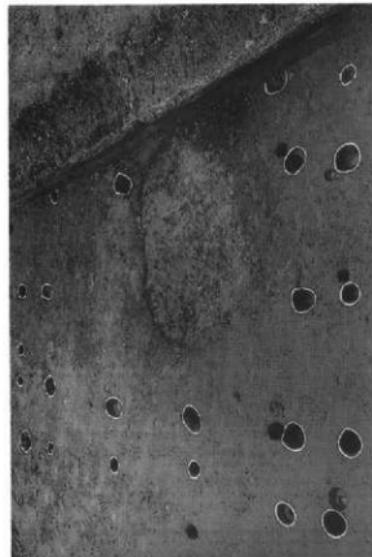
図版 4



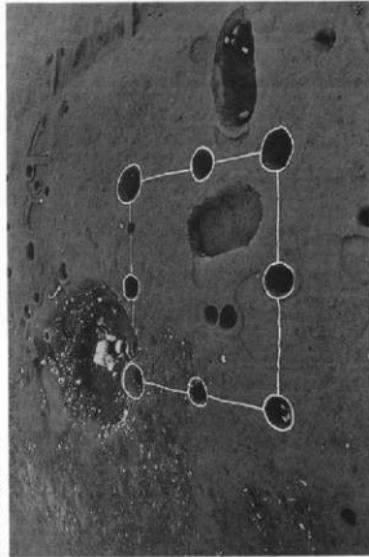
(1)SSB10 (西から)



(2)SSB43 · SSB41 · 42 (東から)

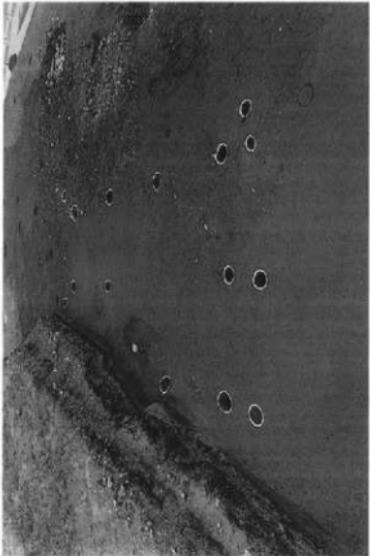
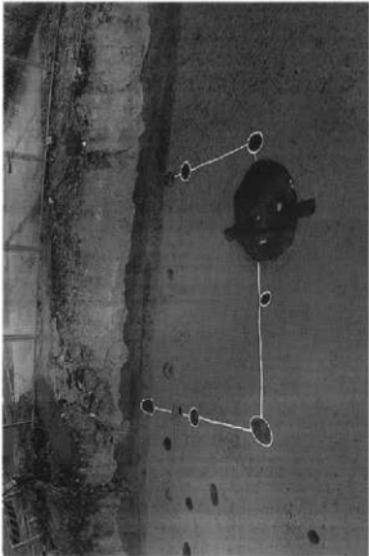


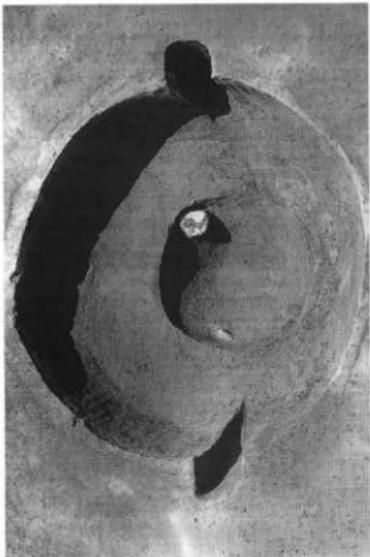
(3)SSB44 (西から)



(4)SSB45 (東から)

図版 5

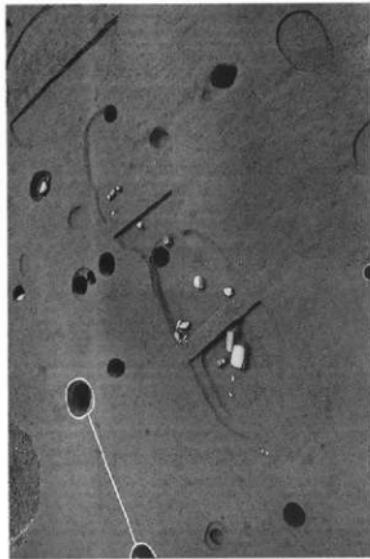




(1)SK23 (西から)



(2)SK24 (南東から)

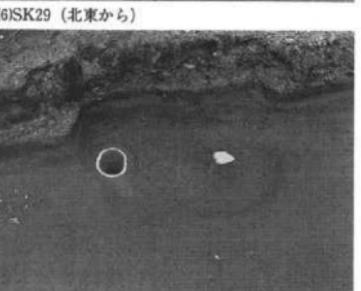
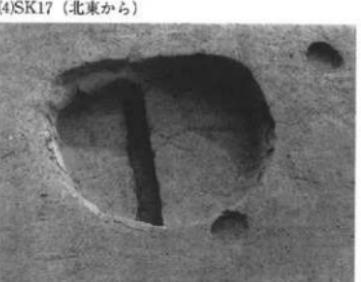
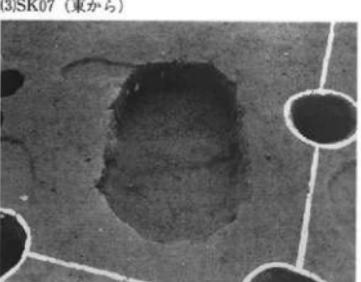
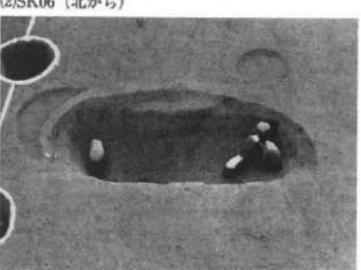
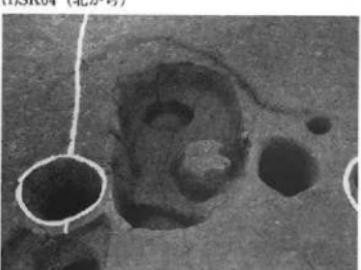
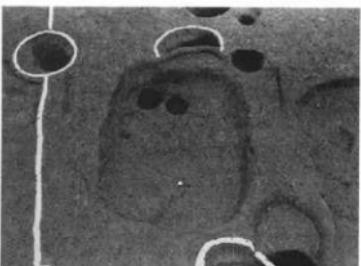
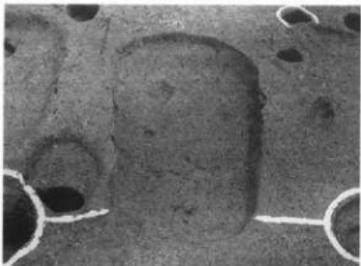


(3)SK09 (北東から)



(4)SK28 (北から)

図版 7

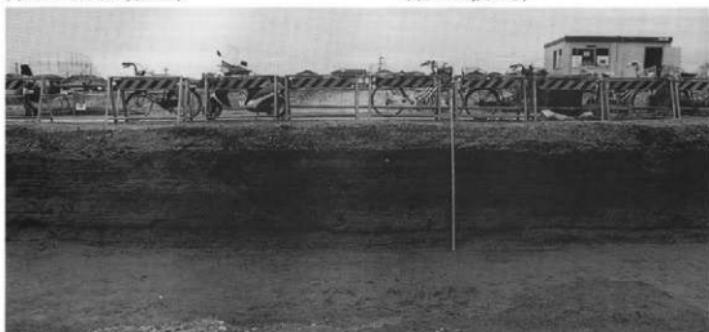




(1)SD11・SA35 (東から)



(2)SD14 (西から)



(3)SX55東壁土層 (西から)

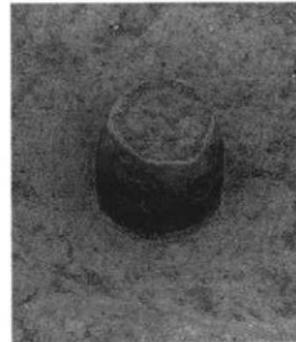


(4)調査区西壁土層 (東から)

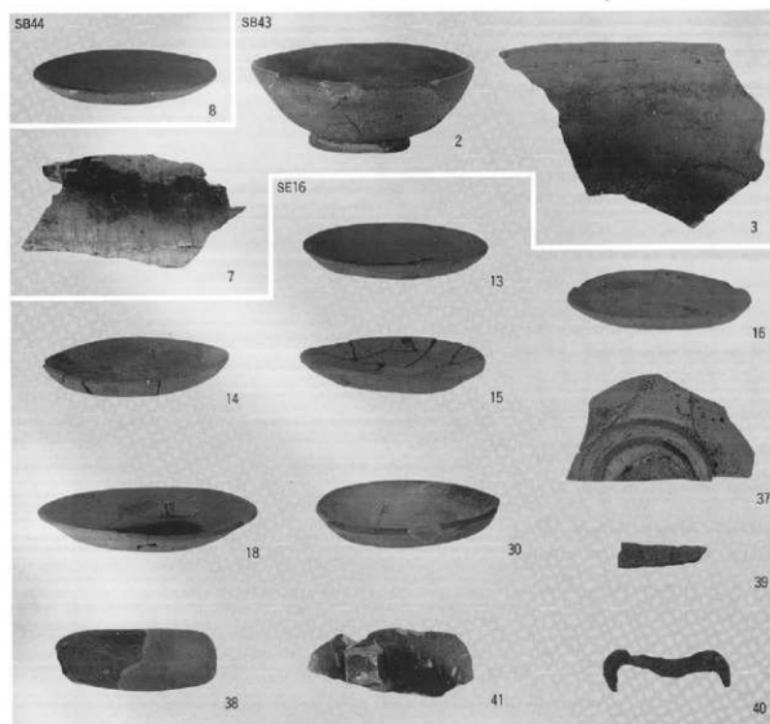
図版 9



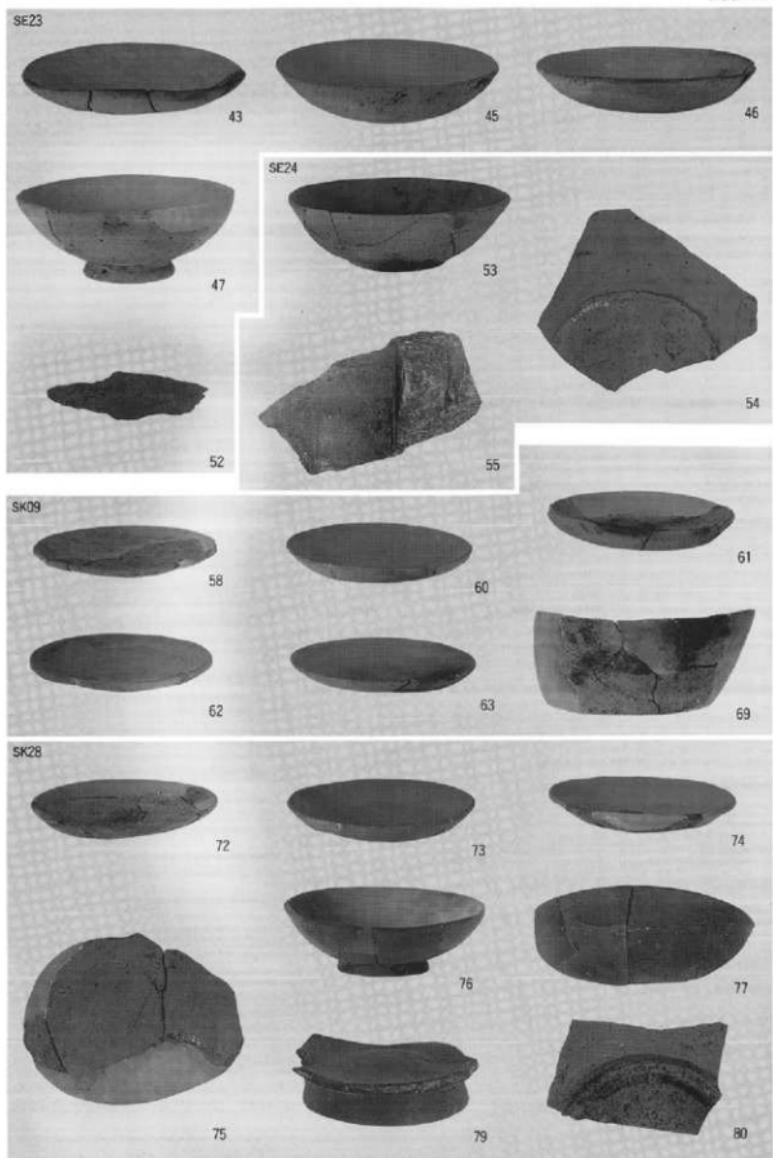
(1)SX55検出状況（南西から）



(2)遺物129出土状況

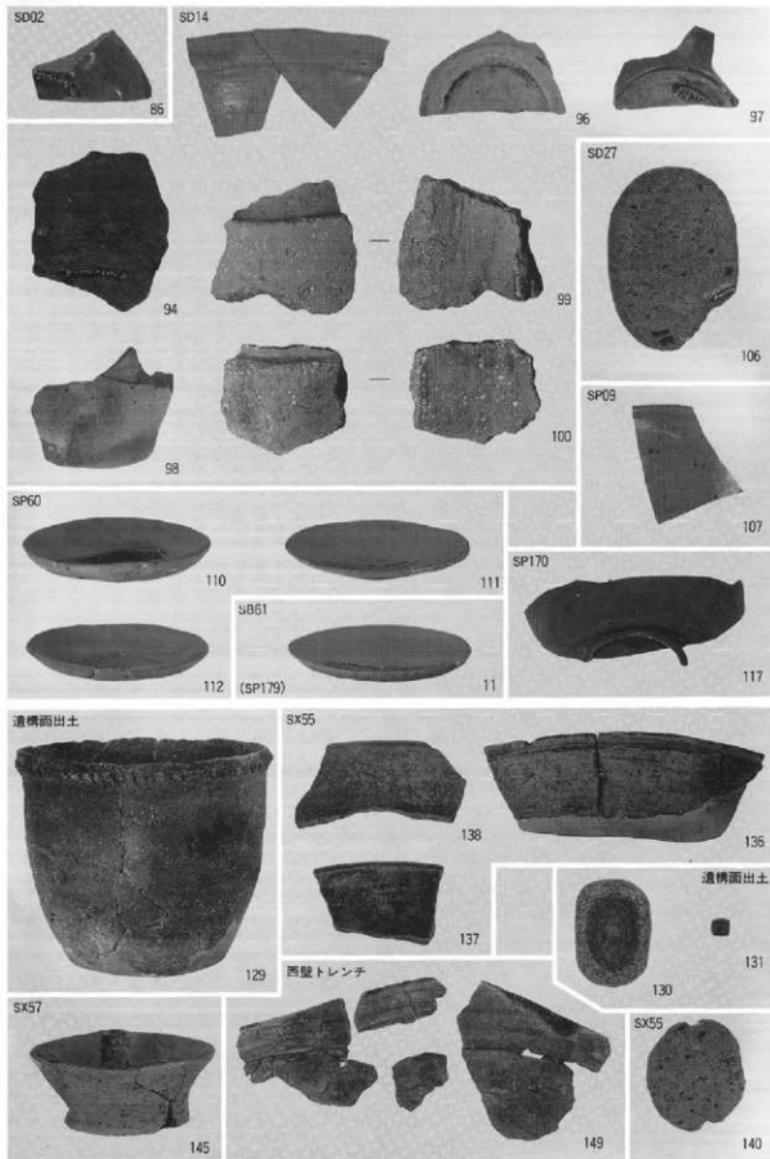


(3)出土遺物 I (縮尺不統一)



出土遺物 2 (縮尺不統一)

図版 11



出土遺物 3 (縮尺不統一)

福岡外環状道路関係
埋蔵文化財調査報告

— 3 —

次郎丸遺跡
第2次調査

1997年（平成9年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印刷 赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8-34